たと彼は云つた。吾々の想念は、「吾々が見、觸れ、味はふ所の事物によつて整へられるものではなく、事物は吾人の想念によつて整へられるものであるといふ事を證明する事によつて彼は人類の經驗を顚倒し、人間の結ばれた常識を排除しやうとした。例へば、此處に人間の前に一本の樹が立つて居るとすると、其れを觀て其處に樹があると斯う思ふのではない、其の人の觀念が作つた樹が其處に在るのだといふのである。即ち彼の認識が樹に適應するのではなく、樹が彼の認識に遵合するのである。それから其の樹の實體を知る術が無い、たゞ認識に宿つた外觀で其樹を知る丈けである。即ち野原に自分の前に立つて居る樹を彼は少しも知らない、唯、自分の思想つ力が我が心に植ゑ付けた所の心の樹を知つて居る丈けである。彼は樹の實質を知らない、而して彼はまた樹の外觀を印象した心意の實體を知らない。彼は單に觀念を知つて居る丈けである。であるから、實際に於ては其の樹といふのは彼自身の觀念に外ならない、其の樹

は、其れが眼前に在る間の彼自らの意識の狀態である。

之は常識に對しては確につまらない又不合理な事に思はれやう。けれども何なに馬鹿々々しく見えても之は充分考へる價値がある。何となれば、心意の實體を知る事は不可能である、心意に印象する事物の實質を知る事は不可能である。事物の外觀の外は何事も知る事が出來ないといふやうな言葉の森から小狐が幾多顯はれ出て、百年の間、思想てふ葡萄樹を荒らしたからである。知識界の狐狩りは時間潰しだといふ人があるかも知れない。けれども、さうではない。總て害を爲さない生の生物は生存の權利がある。けれども有害な煩ひの多いものは見付け出して殺さなければならない。微生物でも人生に有用なものもあれば、又病源菌といふ奴もある。パスチュールは其の天賦の精力を込めて、黴菌の性質と其の隱れ場所とを示して人間の健康に多大の貢獻をした。

七、宗教科學はカントの知識論を以てしては不可能である。實在を捕捉する

知識は總べて既定の三點を其の必要條件としなければならない。若し樹の知識を得るといふのには、先づ樹を知覺し、其の存在、其の實質、其の外觀、總べてを知覺し、而して自らは樹を知覺する其の人であつて、我が心意は、目を通して樹の外觀、實質を見、而して其の樹を視つゝある時は其の知覺を通して其の樹と攀應して居るのであるといふ事を認めなければならない。此の單純な知識にも知覺者、知覺物、知覺力といふものがある。茲に知覺者は物を視る人間、知覺物は見られる對象物、知覺力は事物を見る心意の働である。で、カントは事物の實體と事物の實體を視る心意とを知る可能性を否認した、而して吾々が樹を知るといふのは、知覺で以て實際其の外觀を知るに止まるのであると主張した。

八、クリッフォード教授が云つた『事物は予が意識中に於ける變化其のものに外ならない』。

フィヒテはカントの智識論に據つて斯う云つた『予が內部にも外界にも永續する事物が無い、唯到る處に不斷の變化が在る許りである。予は他の實在を知らない。而して又自己の存在をも知らない。大體實在といふものは無いのである。然り、予自身は絕對に何物をも知らない、而して予は虛無である。唯茲に心象が存在する。而して存在する所のものは心象のみである、心象は心象によつて自らを知り、心象は心象と相抱いて居る。予自身は此等心象の一である。而かも予は此の心象でさへ無い、單に此等心象の混亂した一の心象である。だから實在は神秘な夢となり、事物、知皆總て生無く、夢はたゞ夢と相抱いて居る』

クリッフォードとフィヒテにより、斯うして吾々はカントの知識論を分析し盡した。一は知覺される事物の實體を否認し、他は知覺をば移り行く心象と觀じて心象以外のものを皆否認した。カントやフィヒテやクリッフォードは斯んな風に考へて、其れが物質的、人的、神的たるを問はず總べて事實てふ外界の實

在は知に依つて決定されるもので無く、意志によつて決定される事を認める事が出來なかつた。知は、五官や自我意識や宗教心に依つて心意の範圍内に持ち來たされた論據を單に比較し、對照し、而して結合し得るのみである。知のみに依つては、幾多の實在から知覺が幾多の報道を齎らすのであるから其れが客觀的に眞實であるか何うかを決する事が出來無い。若し人間に知覺や知力以上の能力が無く、視力思考力が滿足の出來得るやうなもの以外、要求、恐怖、希望といふものが無いならば、人間の知力といふ機械が一般の理想を研ぎ出すのに用ゐた知覺は果して現實世界から來たものか、人間から來たものか、神から來たものか、其れとも又、腦髓といふ檻の中に產み出されたものかといふ疑問が決して起つて來ないであらう。

九、若し吾々の概念が、實際生活に於て意志の試錬に逢つた時、立派に働き些の混亂がなく、實際上の失敗を招かないならば、其の概念、其の思想は科學的であると云ふ事が判る。理性は感情の世界から思想の世界を造り出す、而して若し人間が思想と同じ樣に行爲といふものゝ必要が無いならば、其の心的世界を直ぐ科學にしても良からう。けれども人間は現實生活を營まねばならない、だから日々其の思想の世界を外界の事實に飜譯して其れを試して見なければならない、目に見えない知力といふ機械が遙つと下つて表面の方で印象を分けて一般名題にしてしまふ。斯うして行き着いた結論が互に一致し、また其の基礎を成して居る事實と一致して居る樣に見える、が思索者が隱れた思想の領土から外界の岩角嶮しい實在の事實世界に踏み入つて其の決論を實行に移した時、初めて彼は其の科學的價値を決定する事が出來るのである。錬金術者は幾世紀もの間、抽象的な推斷作用に依り劃策を立てゝ、自然の元素中に人生の錬金藥や仙丹を見出さうとしたけれども、斯うして計畫したかと思ふと外界の理法は直く樣彼等の心的係締を微塵に粉碎してしまふ。トレミは大陽系の眞中に在る

地球によつて天體の計畫を想像し而して蒼穹の經綸を捉へやうとした。けれども星の運行によつて其れが破壞されてしまつた。コペルニカスは成功した、何となれば彼は天體の研究によつて其の分類法を繼續したからである、而して現實の試練を經て居たから、彼の主張する所は科學的であつて、吾々は將に科學的宗教を決定しようとして、科學上の原子を發見する爲めに歩む同一途上に在るのである。遊星に關する吾人の知識が、吾々の船を帆走らしめる眞理を確定し得る所の其れであるならば、吾々は科學的に星を發見した事が判る。分子に關する吾人の知識が、吾々の食物を調理し藥品を調劑する理を確定し得るところの其れであるならば、吾々は科學的に原子を發見した事が判る。宗教に關する吾人の知識が、吾々の靈的生活を完全に、連續的に而かも勝ち誇つて爲さしめる眞理を確定し得る所の其れであるならば、吾々は科學的宗教を見出した事が判る。

十、知覺や心的機能は各人の自我といふ範圍内に制限されて居る。事物が吾々の前に顯はれ出て而して其れが吾々の心に觀念を作り上げる爲めに基礎として用ゐられなければ、吾人に事物の直覺、事物の直觀といふものがない、知力は單に感覺の印象を比較し、對照し、連結し得るに止まる。それであるから人間が思考から行爲に移つた時に初めて其の觀念の實際的價値を測り得るのである。確かな、矛盾のない心的提案は知力の要求に全然適合するものである。けれども人間には衣食住の必要がある。また人間は他の人と相持ちしなければ何事も爲し得ない。彼は其の知力といふ機械が區々の印象から一般觀念を作り出すのを熟と凝視めて自分自らを其の意識の中に閉ぢ込めて、他と全く離隔せしめてしまふことが出來無い。彼の周りの世界は萬物が紛糾錯綜して永遠に渦を卷いて居る。であるから彼は進まなければ轢き倒されてしまふ。働かなければ殺されてしまふ。彼はまた我が思想の作品が自分に取つて何んな立派な美は

しいものであつても、其れを自己に閉ぢ込めて置く事が出來ない。彼は其れを再生しなければならない。彼は未來に於て實を收めやう爲めに其の心の苗木を植ゑ付けねばならない。彼は世界といふ耕地に種子を蒔かねばならない。彼は驀進しつゝある混成の群衆――自らも其の一部分なる――中に我が位置を守らねばならない。

其れであるから、彼は思想を作り上げる知力以外に、「情意」を用ゐて其の概念を動作に譯出しなければならない。其の概念、其の思想が具體化して、形體あり色彩ある事實と成つて人間の前に顯はれ出るや直ぐに彼は其れが宇宙に調和するか何うかを決定する事が出來る。彼は眞の暴風に荒れ狂ふ大海に其の心の船を乘り出した時、若しも夫れが首尾好く大浪を蹴破つて進んだならば、彼も全世界も、其の船の航海に堪へる事が判る。ランフォード伯が其熱の學理を移して、撓まず勞作する車輪に變じた時、地上の貧民は其れが科學的である事を知つた。シイ、ダブルユー、フヰールドが其の學理を應用し、海底電線をもて大西洋の西岸に橋架けた時、全世界は其れが科學的である事を知つた。何となればフヰールドが眞なりと認めた考が愈々其れを實地に試驗した所が、果して、其の眞なる事を實現したからであつた。

歴史の途には、學理てふ心的崩壞物が撒き散らされて居る、此等は曾て眞理なりと認められたものであるが、實際的試練に逢つて其の眞なる事を實現しなかつたので、見る蔭もなく新歩の道端に投げ棄てられたものである。人類の記錄は大概、社會的な記事や、政治的な記事や、道德的な記事や、宗教的な記事や、機械的な記事を滿載して居て、其等が或時期には眞實であると思はれたのであらうが遂ひに實際に働かなかつたのである。吾々の確實な知識は其の現實世界のものたると、人的のものたると、神的のものたるとを問はず總べて知力の檢閲を經、而して後に意志力と實際生活との試練を受けた所のものである。

人間の知力が事實の基礎から得て、眞なりと認め、其れが意志力と實際生活の試驗に逢つて一般の經驗として働き、而して其の働が繼續する所のものは科學と稱する事が出來る。若し科學といふことが出來なかつたならば、自然、人、神に關する吾々の知の世界は總べて幻想である。けれども吾々は此等の知の世界を幻想とは思はない。何となれば、何等混亂する事なく、惑はされる事なく而かも我思想の世界から地球の極地に到るべき心的機關車を走らせる軌道が事實の世界には無いと自ら極めて、想像といふ己が王國に立籠る事なくして其等の知を實際に働かし得るからである。

十一、物質と運動との王國に於て眞なりと假定せられ、而して其假定の如く實際に作用する所のものは自然科學と見做す事が出來る。だから、若し一定量の水素と酸素とが化合すれば水に成るといふ事が假定せられ、而してH_2Oの方式に從ひて實驗した結果水を生ずるならば、其の假定は科學的であるといふ事

が分る。若し水素の原子が鹽素の原子と化合し鹽酸を生ずるといふ事が假定せられ其の假定を HCL の方式で實驗した結果、鹽酸を生ずるならば、其の假定は實際に一致したもの又科學的であるといふ事が分る。若し或る計算による、二十五年後の或る日の或る時間に日蝕があるといふ假定が、其の日になつて正しく太陽が蒙蔽すれば、其れは科學的であるといふ事が分る。永い間、總べての固形體には不思議な無色、無臭な、而して觸れても分らないエーテルといふ物質が瀰漫して居ると考へられて居た。ハインリッヒ、ヘルツはエーテルは音に熱、光、色の波動を傳へる許りで無く、電氣の振動をも傳へる事を發見した。けれどもヘルツの此の發見はマルコニに到つて初めて實驗された、伊太利に於ける父の農場に居たマルコニは花園の兩側に竿を樹てゝ實際に甲から乙へと音信を傳へた。ヘルツは電線の輪を傳ふエーテルの波動を捕へた、而して其の相離れた兩端に呼應して飛ぶ火花を見た、之が彼の心を滿足せしめたが、民衆の

心に印象し、民衆を納得せしめずに止んだ。けれどもマルコニは實際に作用するエーテルの性質を證示した。而して吾々は今日、音信がエーテルの震動によつて大西洋を横切つて居る事實を知つて居る。だから吾人の有つて居るエーテルの知識は科學的である。此の知識は正確な、證明の出來得るものである。假定の眞なる事が實驗に於て證明される所の事物は、科學の總べての項目が樹立する其の條件に一致するのである。

若し人間が皆意地穢い虚言者で良心も何もない盜人であるならば世界の貿易は不可能である。之は疑ひの無い事實である。だから、商買の實際上の事實から觀て、正直、誠實といふ事を基礎とした取引關係は科學的であると云へやう。又、一物が同時に白たり黑たる事が出來ず、一物の温度が同時に沸騰點に上り零點に下る事が出來ないといふのは科學的である樣に、人間同志が實際に烈しく憎み合つて居て、折さへあらば咬み付き喰盡さうとして居るならば到底社會

的生活を營む事が出來ないといふのは科學的である。それであるから、吾人は繰り返して云ふ、總べて思想、觀念、概念、感覺、情緒、感情の王國に於て眞實なりと假定された事物が其の假定通り實際上作用する所のものは科學的である。若し神は善であり、人間の道念を高めるものであり、而して吾人の心が若し神の眞善美を渴仰する時、吾々の生涯が高調されるものであるといふ假定が宗教生活の事實に於て、生命の標準が低きより高きへ次第に上つて行くのを見るならば、其の科學的である事が分る。若し又神が賤劣鄙陋なものを惡むものであり、而して吾々の心が若し惡を選んで之に就くならば吾々が到底達し得られさうも無い程の低い標準に下向するといふ假定が、罪惡に生くる實際生活に於て人間の無下に墮落するのを見て其の科學的である事が分る。

十二、宗教の科學は、外界の宇宙の科學や內部の自我の科學と同じ樣に可能なものである。ヒユームは吾々の有つて居る自我の知覺は流れを成して次から

次へと續いて通り過ぎる印象に外ならないので、而かも實際に其れは自我から來るものでは無いと主張した。それで物質論者はよく宗教心といふものは無限の靈的實在から來た眞實な情報で、それが吾々の心に語らはうとして居ることを認めない。が、人類の歴史を心に浮べるものは、宗教的直覺は外界の認識や自我の意識のやうに極めて有りふれたものである事を否定する事が出來ない。たゞ吾々の決定すべき疑問は種々な知覺の意義と其價値とである。吾々は丁度物質界の科學や個人的自我の科學を捕へる樣に宗教的科學を我が物とするのである。一體、知識が意志と實際生活の實行といふ試錬に逢つて正確なものに成る迄は科學とは成り得ない。外界や自我や初から來る印象は絶えず理性の前に集まつて來て其處で概念に變ぜられる。けれども實行の試驗を經なければ決して科學にはならない。感覺は實在の世界から來る、而して理性は其れに反應して一個の觀念の世界を作り上げる。此の世界は何だか感覺が出て來た世界に一

致するらしい、けれども實際の事實に作用せしめなければ之を決定し得る途が無い。

ワットは湯沸の蓋を押し上げて居る蒸氣に氣が付いた。彼の理解力は此の直觀に働いた。彼は爐と汽罐の備へがある機關を考へ出し其れに力を利用し、機を驅つて地上に敷設した軌道を走らしめ、而して輸送の目的を達する裝置を工夫した。而して遂に此の全計畫が彼の心に完成された。彼が其心に藏した此の貨物と乘客とを輸送する驚嘆すべき劃策は恐らく當時何人も之を知らなんだらう。ワットは其の想像の翼に翔り、軌道が地球の表面に帶と繞り、而して黑烟を吐く怪物を載せた働輪が其の上を轟々と音立てゝ風を切つて行く樣を心に描いたかも知れない。彼は幾多の知者を獵り集め而して彼が想像といふ機械場で作つた此の鐵の車によつて世界に變化と革命との行はれたことを、高調した言葉で觸れ上げたかも知れない。

其れは確かに興味があつたらう。けれども其れは科學的では無かつた。其れは實地に試されてなかつた。其れは總べて知的な而して推理的なものであつた。けれども意志の力と實際生活の力とが呼出されて理解と協力し、而して觀念に描かれた軌道が具體して鋼鐵の軌道と成り、觀念上の機械が具體して實物となり、而して實際の機關が實際の軌道を走つた時に、何人も此の大發的を成した其の心的活動は總て科學的であつた事を認めるのに躊躇しなかつた。其れは意志と實際生活との檢定を經たから科學的であつた。其れは宇宙の理法に合致したから科學的であつた。其れは雷に其の想像に於て見たワットに取つて眞理であつた許りで無く其の想像の發表と事業とを見た總ての人にとつて眞理であつた、だから科學的であつた。其れは雷に思想に符合した許りで無く、業に符合したから科學的であつた。其れは想像と感情から出來上つた漠々たる心の雲を推拔いて下り、外界の實世界を透して其の進路を拓り開く事が出來た、だから其れは科學的であつた。

十三、五官の知覺から出來上つた知識は科學と稱へられる爲めには實驗を經へなければならない、丁度其の樣に宗教的理解から來た知識が科學と呼ばれる爲には試錬を通過しなければならない。實際生活の試驗を首尾よく通過し得ない所の知識は科學でない。而して實際生活の試錬を通過し得る知識は、五官の知覺から出來上つたのでも、自我の認識から出來上つたのでも、又宗教的知覺から出來上つたのでも、其れが總べて科學である。暴風雨吹き卷いて、移り變りの多い、死の暗い影が谷を爲して居る此の實社會の烈しい壓迫に揉まれて、尙ほ損はれない其の色々な實在から受けた知覺が成した知識は、斯うして普く其の確實な事を表はすのである。堅牢な船は何んな海をも航海し、何んな暴風にも堪へるやうに、斯うした知識は事物の眞の本性に一致し、而して其れに全く適應して居る事を自ら實證して居る。聖オーガスチンは廿八歳に成つて、自分

が神を無した罪の多い、穢れに染んだ者である事を告白して居る。母のモニカは絶えず彼の爲めに祈つて注意深い宗教的教育を施した。だから、彼は己が罪と、其れを赦す神の心とを我が胸に刻まれて居た。此の宗教心が理性の前に來て概念となつた、けれども其れが實地に働かされ無かつた。だからこれは丁度、五色眼鏡に影る派手やかな、眼界に千變萬化する畫圖のやうに顯はれた許りで消え失せてしまつた。而して嫌厭らない事には、彼は遂に吾から進んで最う罪の生涯を續ける事が出來ないと斯うたゞ思つた許りであつた。

けれども或る日、偶然に聖書を開いた途端、彼の目を捕へた句があつた。其れは羅馬書十三章十三節の『行を端正して晝あゆむ如くすべし、饕餮醉酒また奸淫好色また爭鬪嫉妬に歩むこと勿れ云々』といふパウロの言葉である。其の時彼は之を實行しやうと決心した。而して之を行つた其の瞬間に天の窓は開け放たれ、光明と靈感インスピレーションと欣喜とが流れを成して其靈魂に注ぎ込んだ。斯うして

オーガスチンの生涯に一大革命が起つた。彼は失望と罪惡とのどん底から、自制と希望とに輝いた天上へ推し上げられた。自己以上の力に己を獻げ、意志を働かせ、實行する事によつて、彼の頭に描いた神の知識は確實な事實と成り、遂に其れが科學を形作つた。ワットが、其の蒸氣機關に出發した作業によつて、よく其の知識を科學と成した樣に、オーガスチンは、彼をして新人たらしめた其の確信の斷行によつて、彼の知識を科學に變ずる事が出來た。

オーガスチンが實行を透して到達した科學は、ワットが實驗によつて辿り着いた其れの樣に萬人に取つて確實なもので無いといふ人が在るかも知れない。けれども其れは確實なものである。オーガスチンは其の事業と復活後の著作に依つて、一千年の間宗教歴史の赴く所を限定した。彼は其時代に於ける教會の狀態と教義の要件を變じた。彼はドネータス派とペラギウス派との教義を辯駁して之を破壞し去つた。ワットの蒸氣機關は近代生活てふ表面の狀態に影響し、

オーガスチンの事業は靈魂の奥底に働いた。人間靈魂の感激を更め、之を指導して行くのは、鐵道を敷設する爲めに山を切り開き、鐵の分子を鍛へ上げて蒸氣機關と成すよりも遙かに困難である。人類の歴史に於てオーガスチンの事業が其の實際に影響する所は、蒸氣機關によつて成される其れよりも遙かに偉大であり遙かに深遠である。彼が其の理論上の知識を科學とする爲めに用ゐた方法は、總べての知識が科學たる爲めに通過する所の單純な、實行の試錬其のものであつた。彼は我が心の宗教的知覺が是認した、母に聽かされた聖書の教が眞理であると確く信じて其れを斷行した結果、彼の全生涯は其の衰頽と矛盾との凋落した水平から脱して、圍繞する事物と調和し、宇宙の法則と合致する天地に上り來つた。彼が大悟する以前、直覺の反射光を甲から乙へと目當ても無く投げかけてゐた其の心の機械は、今や意志の助を得、目當に向つて運轉し出した。而して彼の生涯は初めて意味あるものと成つた。彼は新しい未來の前に

立つた。而して萬象は今迄と違つた貌を彼に見せた。斯うして彼は此れ迄感じた事が無かつた生存の理由を認めた。新しい太陽が天涯に輝き渡つて、總べての天體が親しい關係を有つて、歡んで彼を迎へる樣に見えるのであつた。其の後の數年を透して彼は次第に進展して行く生涯の輪廓を見た。而して彼の靈が直覺した所の報道に作用する意志の働きによつて無限の變態が成されてゐた。

斯うして變化に富んだ、破壞的な千五百年が經過して吾々の時代になつた。彼の『懺悔錄』は萬代を通じて、理論的知識を宗教的科學と爲す所の秘訣は確信の斷行にある事を敎へるであらう。『神の都』は神の直覺が意志と協力して築き上げた都は、五官の直覺に建てられた羅馬の都に優つて持續するといふ眞理を永遠に物語るであらう。而して若し物質的事物の眞實な假定が實驗を經て自然科學を成すとならば、靈的事物の眞實な假定が實行によつて宗教科學を構成しないといふ理が無からう。吾々は獵り立てられて泥土と其中に僅かに逃がれ

得る生物以外には何物も存在しないといふ說を受け容るべきであらうか。吾々は永遠に空間を上下しつゝある物質と運動以外に何物も存在しないと結論すべきであらうか。物質世界が物質と力との運動から生じたと觀ずるやうに、思想、觀念、概念、感覺、情緒、感情の一律な連續した關係と其の共力した存在から、文明てふものが胚胎したと觀ずる事が出來ないであらうか。吾々は思想を腦の分子に分解して初めて其れを科學的に取扱ひ得るものであらうか。蒸氣は河の原子が蒸發した其のものである樣に、思想は腦の原子が奔騰した其のものであらうか。否、さうでは無からう。河の原子の蒸發は河が更に醇化したものとなるに過ぎない。けれども思想は決して腦の質點が精練されたものとはならない。

第五章　神の欣求と科學的宗教

人間は其の目の前に顯はれた事實の中から、其の理解力の爲めには知識を組み立て、又飢の爲めには食物を取る所の事物を見出す樣に、事實の中から、其の靈魂の爲めに宗教を構成する所の事物を不變に見出すのである。生活上食物は無くてならないものである樣に、宗教は人生に無ければならないものである。凡ゆる生物は同一の宇宙に對してゐて、夫々之に關係し、其の能力に從つて宇宙の原料を受け、之を其の天稟に應じた色々の物に變化させて行く。水蟪類は萬象の深底に珊瑚島を築いて、人間は其の絕頂に倫敦の樣な都府を建てる。人口の中心を比較した優劣の逕庭は、其單純な生活と複雜な生活との距離を語るものである。植蟲が大洋の潮に抗して建て上げた邸宅は、此の小い勞役者が海水から吸ひ取つた炭酸石灰から成り立つて居る。彼等珊瑚蟲が支配する天地は

宇宙の一少部分に局限されて居る。而して生存を續けしめる財寶が積み重ねられて居る外界に於て、彼等の活動は僅かに浮流して居る分子を海水から取つて、其れを暗礁に塡め固める事に限られて居る。

一、けれども、海の森を築き上げた原形質の果てから埃及の金字塔を建て上げた人間に至るまで凡ゆる種類の勞作者は其の力を働かせて色々の異つた實在を捕へては夫れを各々の生活の形式に仕組んで居る。それだから、其の作り上げた仕事の品等によつて各勞作者の階級が定まる。

貝の生活形式は其の作つた白堊の懸崖に依つて知られ、海綿動物は其の建てた水府に依つて知られる。蜜蜂の位階は其蜜房と蜂蜜とに依つて定められる。總て生物は自然界から作り上げた事物に依りて自己を榜示して居る。だから吾々は其の事業の特質の中に各生物の天稟を知る事が出來る。

人間も、他の生物の樣に、外界に見出す所の事物を處置し得る事に依つて一

の階級に存在して居る。人間が地球上の生活を始めた時には、自分以外の匍匐つたり、泳いだり、歩いたり、飛んだりする生物が其の進路を拓り開いて行く樣に、都合よく備が出來て居なかつた。彼等生物には、其の當初から遺憾無く發達した本能があつた。人間には理性があつた、けれども其れは外面に表はれず內部に潛んでゐた。彼等の諸能力は生前既に其の爪牙、鰭、嘴、尾、翼に發達して居た、けれども人間は其の能力、其の發見した所の物を、更に骨折つて鍛練し、而して徐々に手引かれて來なければならなかつた。彼等は自然といふ宏大な工藝の學園から躍り出で、生れ乍らにして其の業を修得して居た。蜜蜂は羽が生へると直ぐに蜜を集めてゐた。海狸は歩けるやうになると直ぐに堤を慥へて水を堰き止めて居た。人間以下の生活階級は皆自分に關はりある所の物が何處に在るか、最初から確然知つて居た。何うしたら必要な物と自分との間に閉された扉が開くか、其れも知つて居た。所が、人間は丁度無學者が博物館へ

行つた樣に唯、呆然と突立つて居た。

人間以下の凡ゆる生物は人間に優つて居た。彼等は其の邸宅を知つて居た。鳥は樹に囀り、食物を喙み、巣を作り、小鳥をはぐゝみ、而して世界を我が物顔に翼を鳴らして大空を飛んでゐた。魚は丁度夫れと同じ樣に海に親しんでゐて、其の深底に遊び、海水に生を託して其の中に無限の慰藉を得て居た。上の大空に己が住家を見出でた鳥と、下の大海に己が水鄕を漕ぎ行る魚の間に介在した人間は弱い、助けない、哀れな他の生物と共に地球の上に慄えて立つて居た。外を圍繞く豐富な此の世界も人間に取つては、之れといふ取り分けた食物や衣服や隱家や、一生を導いていく之といふ仕事を與へさうにも無かつた。

二、人間以外の動物には、何れも食物や仕事が備へられて居た。唯、人間許りが番附に載つて居ない樣に見えた。自然の計畫には、腕足類から猿猴類に至る凡ゆる演伎者の爲めに充全した設備が整つて居たらしい、けれども人間が舞

臺に到着したのは、既う役割が皆割當てられてしまつた以後であるやうに見えた。

歷史といふ歷史を繰つて見ても塵と寂しさとの複合したもので、最初の人間ほど憐むべきものはない。彼の面した宇宙は何だか斯う人間の破壞をやる樣に出來て居るらしかつた。天候は彼に逆らひ、野獸は彼を敵視して居て、何一つとして溫情と好意とを以て彼に倚り掛つて來る物は無いらしかつた。

けれども、凡ゆる物が彼を惱まし、彼に逆つた活劇の眞最中の處へ來て其の運命が僅かに開け、彼は愈々人間の立ち場を退くか、其れとも生存の權利を主張するかといふ瀨戸際に立つた。此處までやつて來た彼は遂に萬難を後へに排し其の立ち場を固持して人間の生涯を始めた。が何うして生活を續けて行かうかといふことは何よりも先づ彼の注意を引いた當面の問題であつた。今日、吾々が其の原始時代の食物や體に纏つた衣や其の住家を、今日の人間の食物や衣

服や邸宅に比べる時は、人間と、彼が抑々の初から其の經歷を共に始めた動物との間には無限の逕庭が存する事が窺はれる。植虫は依然として、萬象が世界の黎明を告げた當時の位置に在つて尙ほ、海水から石灰を吸ひ取つては海中に昔ながらの城府を築いて居る。蜜蜂は原始時代と變つた事もなく花から花へ飛び廻つて蜜を集めて居る。海狸は今も尙、其の尾で巧みに泥土を掻き集め、同じ土工の作業を繰り返へして居る。人間以下の動物は原始に、今日有つて居る天賦の能力を以て出立し、而して何時も其の出發した處に停滯して變化も進展も無い。

人間が其の生涯を始めた時は何物も有つて居なかつた、唯、諸能力が其の資質に潛まされてゐた。之が餘り奧深く秘められて居た爲めに人間自身にも解らなかつた。所が其れは段々發見されて來て、遂に彼は其の使ひ分けを知り、萬物を征服して此處に向上の途一筋に躍り出た。斯うして最下級に出發した人間は徐々に歩を進めて遂に最上級に桂冠の榮を荷つた。最弱者から人間は強まり強まつて遂に最强者と成つた。一歩一歩、人間は基底から攀ぢ登つて遂に萬物の絕頂に到達した。人間を壓し潰さうと嚇しかゝつた元素と力を征服して之を人間に隷屬せしめた。人間は凡ゆる歷史を眼下して地球と其事業とを我が掌中に收め、現世の全利益を支配した。而して世界の有つて居る凡ゆる意義を知と情と意との方面へ向けていつた。

三、石灰は生物の爲めに造られた。だから生物は之を取り之を堆積して懸崖を築く。花の蜜は蜜蜂の爲めに造られた。だから蜜蜂は之を得て其の蜜房を充たす。而して萬物は人間の爲めに造られた。だから人間は之に依つて商業を營み、法律を制定し、文學を產み、藝術を刻み、宗教を起す。人間は海や大空や地上の原料を捕へて其れを己が生活の形式に變ずる事を知つて居る。だから、人間は全世界を己れに適する物と成して之と親しんだ。人間は地球を花園に變

じて之を己が物と成した。人間はエーテルを己が物と成して其の思想を傳達せしめた。人間は瀑布を己が物と成して瀑の力を光と熱とに變じた。人間は萬物を己が物と成して、指端を萬物の鍵盤に滑走せしめ、世の原始から其の中に宿つて居た凡ゆる豐富な音樂を我が靈魂に流れ入らしめる爲め、其れに必要な凡ゆる組合せをなすことを學んだ。

陸、海皆は我が手に屬きて、
搖れ震ふ精氣は吾に親しみ
疾く此の命令を傳ふるまで、
霧の圍を破りて散らさん。
日の輝く榮の火焔より
閃く光の射線を分ち、
闇を縫うてきらめく國へ
星の神秘をゆきてさぐらむ。

四、總べて生物は其の能力に應じて萬有を見出すものである。而して外界の理法は決して生物を欺かない。アミーバの要求に對してはアミーバに相當したものを以て應ずる。海綿が其の宮殿の城壁を築かうとして要求する物は海綿に與へられる。燕が其の巣を要求すれば其れが得られる。若し原生動物が何物かを要求すれば宇宙は矢張り其の要求した物を與へる。常に要求に從つて其れに應じたものが與へられる。而して自然の計畫は各生物の要求に應へるやうに整つて居る。何んな生物でも外部の事物の組織から其の要求に適つた物を與へられて居る。

人間は本能によつて外界の理法といふ特別な範圍に閉ぢ込められては居らな

い。又組織に於ても外界の理法に局限されては居らない。けれども他の生物はさうでない、虎は叢林に局限されて居る、鯨は海に局限されてをる、鷲は大空に其の世界を限られて居る。人間以外の生物は總べて土地とか水とか大空とかいふ特別な限られた所に繫がれて居る。人間の組織は事物の組織に通つて居る、だから初めには何處へ行つても家が無かつた人間は段々に見付けたものに慣れ親しんで來て今では到る處に其の天地を見出して居る。七星は人間の天地といふ圍の中に存在する事と成つた。人間は星座を其の天秤に掛けて居る。人間は回轉する天體と交通して彼等の秘密を握つて居る。人間は恒星を數へ其の內容を分析し、其の解釋者其の支配者として恒星の間に濶歩して居る。何物も人間の心に關係しないものは無くなり、何物も彼の心に描き出されない物はなくなつた。而して外部に存在する事物の計畫は彼の內部にある知の計畫に響應して居る。永遠の意志は質點、尖體から發出して植物や水生動物や四足動物を透し

て、限られた不完全な生活形式に自己を表現したが、最高の舞臺が到達するに及んで人間の生活に自己の凡ゆる內容と全意義とを表現した。而して人間は萬物を測る標準と成つた。萬物の上に聳えた人間の生活は、萬物の階級を定める立脚點に立つた。靈妙な働の過程が其の頂點に達した人間は啻に萬物の嗣子たる許りでは無い、萬物の解釋者であり、又萬物の解釋其の者である。

自然は自然自らを知らない。無限の心の自覺は有限の心の自覺の中に自らを繰返すものである。

五、何よりも後に生れ出て何よりも新しい所の人間、無限な神の有限な子供は進んで宇宙が與ふる物を得ようと努めて居る。彼は衣食住を宇宙に求めて居る。彼れは自己の道しるべをする本能が無い、して理性は其の生命の奥底に秘められて居る。けれども必要の感じに迫られて彼は自然に對して衣食住を外部の事物に得ようとする。而して外界の力と戰つて居る中に其の理性の力が顯は

れ出て來る。一體自然には彼の身體の要求を滿す物質はあり餘つて居たが、自然は唯彼に天然に存在する其の儘を與へ得る丈けであつた。象の與へられた光は天然の其の儘で象の目に適當して居た。而して象の見出した世界は何も象に敎へはしなかつた、又敎へる事が出來なかつた。夫れは、象は生れながらにして宇宙に處する爲めに必要な仕込みが出來て居たからで結局宇宙といふ大學の先輩であつて何も學ぶ必要が無かつた。夫れだから象は皆抑々の初から其の食物にあり附いて居た。人間は原始から觀念的にも實質的にも自然といふ物に關係しては居たが內外共に何ちらの關係も現實されなかつた。人間を取り卷いて居る自然といふ藏には人間全體の爲めに事物が、丁度蜜蜂全體の爲めに蜜が蓄へられて居た樣に、貯へられて居た。けれども其の扉が閉されて居て蜜蜂が花の心を開く鍵を其の鼻先に持つて居た樣に人間が宇宙の扉を開く鍵は彼の悟性の奧底に深く隱されて居た。併し、段々に彼を宇宙といふ此の廣大な邸宅の大

廣間を開き、其の部屋部屋に這入り而して遂に凡ゆる梯子を攀ぢ上つて自然の神秘に分け入る事を知つた。斯うして人間は世界といふ不思議な者を見出して居る內に、自己といふ不可思議な者を發見した。

事物の組織が外に在つて人間の內部の理解力を有つた自我の組み立てに照應して居る。而して人間は遂に、動物が本能によつて色々な部分に關係した事物の本質全體に、其の理性によつて關係する事を知つた。植蟲が水中に石灰を求める樣に人間は理性が拵へた犁や、耨や、熊手や草刈を使つて野に其の食物を得て居る。又、鷺鳥が冬季には避寒地を追うて行く樣に、人間は其の智慧が工夫して拵へた綿繰機械や紡錘や織機や縫針や裁縫機を使つて其の衣類を作つて居る。而してホヽヅキ貝が海の泥に入る樣に、人間は其の想像が發明した斧や鋸や鶴嘴や鏟や鑿の樣な道具を使ひ色々な物質を以て家を建てゝ居る。

六、人間は自然から物質を需める許りではない、知識を需めて居る。彼は着

物を求めて居る許りではなく事物の想念を求めて居る。彼は住む處の家を必要とする許りではなく思索する知識を必要とする。彼は疑問を起し始めた。暴風雨、稻妻、雷、日沒、寒、熱、空、雪、變化する季節、成長する樹、若草の萠ゆる牧場、出產、苦痛、病、死、何もかも不思議なものであつた。彼はどうかして此等の意義を闡明したいと思つて事實に對した。けれども其の幼稚な心意から出た考は全く兒戲に類したものであつた。だから彼の得た知識といふものは其の理解力の發達に伴なつてゐた。眞理は食物と同じ樣に彼に取つては必要なものであつた。けれども其れを受け容れる力が無かつた。彼は神話を作つて一時其れによつて事物の本性を解釋した。一體神話なるものは心意が實在と結んだ物では無くて實在の眞理を捕へようとして想像が自らの內に燃した處の誤られた光である。神話を見れば人間の心意が事實と親しく交らず自らを辨へ自らを使ふ事がまだよく鍛錬されて居なかつた時の自然や人間や神に關する人間

の思想の狀態がよく解る。神話、それは蒙昧の心意が事實と接觸する事によつて智慧の天界に投げられた、色彩に富んだ爛たる火焰に過ぎなかつた。人間の心意が幾千年といふもの、事實といふ學校で練られた後、地球に來つて其の天體の歷史を尋ねた、而して彼は地質學を以て其の沿革を語る遊星を見出した。今日地球に存在しないものは原始人間が地球を其の住家となした當時にも矢張り存在しなかつた。地球は今日吾人に語ると同じ法則や秩序や眞理を彼に語らつてゐたが幼稚な彼は其れを理解する事が出來なかつた。而して天體や太洋や風や飢や痛や他人との諸關係やに依つて導かれて居た。斯うして彼は高い價を拂ひ遲々と學んでいつたが彼は確實に學んで行つた。彼の進路には苦惱が多かつた、けれども彼は其れを推し退けて著々と登つて行つた。彼の足跡は犧牲の血に塗れて居た、けれども彼は不斷に向上して止まなかつた。

七、人間は世界が自分の理解力では到底解りそうにもない六ケ敷いものであ

ると思つて居たが、一世紀は一世紀と經つに從つて世界の秘密が段々に發かれて行くのを見て遂に此の世界が皆人間に理解される樣な氣がしてきた。斯うなつて來ては最う宇宙は彼に緣の遠い物で無い。海が植蟲に與へようとして居る所のものを以て本能に應へる樣に、宇宙は人間に與へようとして居る所のものを以て理性に應ずる。事物の本質は地球上の動植物を欺かなかつたやうに人間を欺かなかつた。人間が怜悧に根氣よく其の要求を訴へるならば宇宙は一般の經驗上確かな證明の出來る所のものを與へる。而して人間の理性は動物の凡ゆる本能を一緒にしたものよりも遙かに廣大である。夫れは、動物の本能が彼等をして宇宙の或る局限された天地に、限られた其の幸福を享樂せしめるのに反して、人間の理性は彼をして全宇宙を擧げて物質的福祉を無限に擅にせしめるからである。

八、食ふ物以外、考へるもの以外に人間は渴仰する物を索めて居る。彼は食物を索め知識を索め神を索めて居る。彼は食物と知識を索めると同時に宗教を索め始めた。けれども彼は食物を索める身體や、知識を索める心意に就て餘り知つて居なかつた樣に宗教を索める靈魂の事をよく知らなかつた。そして心の働が不充分な彼は知識や衣服の材料を取り得なかつたやうに自然の事實中に藏せられた宗教に關する材料を得る事が出來なかつた。夫れでも彼は何かしらん、原始から其の住家や食物や宗教を得る事物を見出してゐた。彼は物質的であり、心的であつたやうに、常に宗教的であつた。彼は、其の思想や食物の要求に訴へた所の事物の中に何か其の宗教心に訴へたものを見た。自然は原始から人間の身體に取つては倉庫であつた、彼の心意に取ては圖書館であつた、而して彼の靈魂に取つては神殿であつた彼の宗教は不充分なものであつたが夫れは彼の生活や學才に相應したものであつた。

何れの時代にあつても
人間の心情に變りが無い
未開人の胸にも熱望があり
憧憬があり努力がある
彼等はこれを悟らない
か弱い助けない人々は
闇の中を手搜り廻り
其の闇の中にて神の御手に觸れ
高められ力を與へられて強い者にされた。

太古の人間が齧つた骨、其の眠つた洞窟、其の心に流れた自然の儘の思想が蔑視されるやうに其の崇拜した貝殼神が蔑視されるが、彼の骨は市場の豫言であり、彼の洞窟は住居の淡影であり、彼の自然の儘の淺薄な思想は科學の豫示であつた。而して貝殼を拜んだあの靈魂は宗教を尋ね索めて居たのである。

人間は富裕な食料品店や、立派な邸宅や、設備の整つた大學や、コローン大會堂に其の生活を始めなかつた。人間は荒れた地球の曠原に其の生活を始めた。けれども彼は其れを神の像に於て始めた。而して長い間自分の商業や住居や科學や宗教を見出さうとしてゐた。商業、住居、科學、宗教の一半は原始人の組織の中に包まれて、他の一半は外界の事實に存在してゐた。元々商業があつて初めて事物の需要が生じたのではない。需要が商業を產んだのである。住居があつて家居の必要が起つたのではない。生活の必要上住居が出來たのである。科學が知識慾を呼んだのでは無い。知識慾が科學を組み立てたのである。僧侶が聖書や殿堂を創造たのでも無ければまた宗教を起したのでも無い。宗教が其等のものを造つたのである。蜜が蜂の本能を作つたのでは無い、本能が蜜を作

つたのである。珊瑚礁が石灰を見出す能力を作つたのではない。其の能力が其の礁を築いたのである。夫れだから、總ゆる牛肉の市場と磨穀場を破壞しても人間はまた之を立て上げ、總べての住家を燒き拂つても家がまた建ち、總ての科學を毀しても矢張科學はまた組み立てられる。人間世界から僧侶といふ僧侶を放逐し、總ての聖書を海底に沈め、凡ゆる寺院を毀ち去つても、人間は新たに僧侶を任命し、大空の下に新たに寺院が建てられる。而して神は人間に靈感を與へて新たに聖書を書かしめるに違ひない。

假りに凡ゆる天文臺が引き倒され、凡ゆる天文學者が人間の世界から運び去られ、凡ゆる天文臺が燒拂はれ、天文學に關する記事が總べて文學から取り出され、而して天文學に關する討論が嚴禁せられたならば、人類は天體に關する知識を失つてしまふ事に成るであらう。けれども幾世紀かの間にはまた天文臺が建てられ、天文書が書かれ、天文學者が聘せられ而して天文學が組織され、

而かも夫れは破毀されたものと同一のものが再生されるであらう。事實が永久不變であり、而して其の體現した思想が不變であり而かも永遠に同一であるから、一時代に該事實の研究から組み立てられた科學は必然的に他の時代に同じ事實の研究から組み立てられた科學と同一であらう。天界の事實は人間や神の本質のやうに不變である。而して其の中に含まれた思想が發見された曉には、回轉する天體の科學と同じ樣に、夫れは何人にも眞理を語る科學に變ずる事が出來る。

人間の知識慾が學校を建てたり、人間の食慾が其處に飲食店を生じたりするやうに、人間に關係がありまた責任があるやうに感ずる何か目に見えない力に信賴する心が、人間に止むに止まれない渴仰心を起さしめる。人間は到底宗教の中に生きて居るものである。彼は若し食物を絕たれるならば體がひぼしになつてしまふ、若し知識を除き去られるならば心意が瘠せこけてしまふ、若し宗

教を奪ひ取られるならば靈魂が枯死してしまふ。宗教性は物質的性質や心的性質と同じやうに人間の必要缺くべからざる部分を成して居る。人生を鼓舞する宗教を人間から除き去つたならば此の人生は靑ざめて萎れたものに成つてしまふ。人間の性質から宗教的要素を取り去つたならば人間は埃及の金字塔を毀ち、イスラエルの幕屋を引き倒し、エルサレムの神殿を破壞し、アテネの大殿堂を希臘から除き去り、幾多の大伽藍を歐州の天地から取り拂つてしまうであらう。

九、人間の心意から宗教的觀念を截り去つたならば、人間は印度の文學から吠陀の讃歌を拔取り、波斯經典を波斯文學から除き去り、亞剌比亞文學から回々教典を拔出し、佛教文學から八正道を取り除き、基督教文學からバイブルを切り除き、人間の思想に廣く深く切り込んでる宗教的情緒を殘る隈無く取り去つたならば、人間世界は荒れたサハラと化し、區々に生きた人間が無味な單調な孤獨な無力な體を地球の上に横へるであらう。「若し其處に光があつても人間に目が無いならば其れが見えない。音があつても耳が無ければ勿論聞えない。美があつても美感が無いならば感賞することが出來ない。類似關係があつても理解の力がないならば知る事が出來ない、而して神が存在しても、若し宗教心が無いならば、神を見ることが出來ない。而して丁度宗教が人間に對する關係は、視力が目に、聽力が耳に、呼吸が肺臟に、知識が知力に、道德が意志に對するやうなものである。實に宗教は人間が其の實在の本源に到る梯子である。夫れは子が父の家に到る途である。夫れは有限界から無限の世界へ、弱い力から强い力へ、失望から希望へ、動搖から平安へ、罪から淸淨へ、局部から宇宙へ、闇から光へ、時間から永遠へ、地から天へ行く道である。宗教は人間が王の王たる神の血族であるといふ標象である。夫れは人間が其の實在の定義を見出す字書である。夫れは永遠の住家に人間を見失つて歎く其れらの者から人間の靈魂に響かす歌聲である。夫れは神の都の尖塔から波動し來る鐘の

音である。夫れは牢獄から自由の郷へ歸る天上の途に立てる扉である。夫れは人間の旅路が終つた時住むべき朝晨に輝く國の幻である。夫れは泣き悲しむものが跡を絶つた其の海岸から浪が傳へる音樂である。夫れは永遠の晝の丘に咲きこぼれた花が吹き寄せる芳香である。夫れは決して沒する事が無い日の光に輝く靈魂の不朽な邸宅の繪畫である。夫れは決して散り失せる事が無い花園の中をうねり、而して死の蔭の闇に蔽はれない住家の傍ををやみなく流れる命の河の光景である。夫れは靈魂が「永遠」から船出して限られた「時」へ渡り、而して其の漂泊の旅が終つた時は再び永遠へ漕いで行く不朽の海の眺望である。

十、幾千年といふもの、人間は其の物質上の福祉や靈性上の幸福に與からうと思つて色々にやつて見たが遂、近年迄夫れを見出す事が出來なかつた。夫れは事實其の物を研究して得る學理によらず、己の想像で編み出した理論によつて周圍の物質的事實を理解しようとしたからであつた。

彼はまた丁度同じ樣に宗教的事實に秘められた眞理を見出す事が出來なかつた。夫れは矢張り宗教的事實其の物を研究して得る觀念に依らず、多くは想像で編み出して概念を以て宗教的事實に接して居たからである。此の事を明かにする爲めに宗教の事實の一半を含んで居た人間自身を理解しようと努めた彼の中古時代の人間が案出した說を考へてみよう。人間は神の像に創造られたのであるから本質上は神の子で無い、けれども何事かを爲して或は爲せられて神の子と成つたのである。若しも人間が罪人であるならば、人間は神の小供では無い。彼は希望を絶たれた漂泊者である。父も母も無い孤兒である。身に附いたものとてはない、惡魔が其の王國を建てたず、と掛け離れた所で悲慘な生活を、それも辛うじて續けて居る追放者の成れの果てゞある。――當時を支配した人間に關する概念は斯うであつた。神の像は、此の見解に依ると人間の組織の中に織り込まれて居なかつた。夫れは丁度彼が遠い國へ行つて耽溺した生活を

送る爲めに父の家を去らうとした時、口實を設けて被る假面のやうなものであつた。當時の學者の頭に、父なる神の靈が何處までも我が子を搜し求めて、我が放浪兒が父の膝元に歸つて來るのを待つて居る事が浮ばなかつた。また、若し人間が神の法律に違背した爲めに神の子で無く成るならば、人間はたつた一つの行爲で、人間に生命を與へて其の實質中に神の像を印した創造者の御業を引裂いて廢除し去ることが出來たといふことが彼等に浮ばなかつた。けれども人間を燭らした色彩は永遠に無窮に其の生命の組織のなかに滲み込んでゐた。それだから假令、地獄の火でも夫れを燒き滅す事が出來ない。

十一、永遠無窮に何處如何なる處に於ても、人間は神の子であるとは考へられて居なかつた。若し自ら罪の生涯を辿つて墮落したならば彼は失はれたのであつた。若し信仰に依つて永遠の救ひに入つたならば彼は贖はれたのであつた人間が其の何れをも選擇し得る力は確かに危險な恐ろしい特權であつた。けれども人間が此の特權に依つて個人性といふものを脱ぎ棄てゝしまふ事が出來ない。此の個人性は、人間が窮り無く生くる救の生涯に入らうが、外の闇黑世界に罪の生涯を續けようが、永劫に亘つて人間の生得權であり人間の必然的な相續財産である。人間は罪に穢れた者である事は凡ゆる歴史が證明して居る、けれども罪に汚れて居ても自己といふものから脱しはしなかつた。彼は人格的心靈としての自己を肉體的、心意的自己の諸方面に陷れて神と結んだ一致を破つた。而して神に背いた彼は自らを毀して切れ〴〵な弱い者に成つてしまつた。けれども彼は神が創造した觀念上の人間の骨組、貌といふものを失はなかつた彼は靈的一全體から分割した自分を天來の助を藉らずに再び回復して神に交はる力を失つたけれども、彼の生命から父なる神の像の痕跡と色彩を失はなかつた。若し人間が其の罪業によつて此の痕跡、色彩を失つたならば最早天父は人間の靈魂の中心に訴へる何物も無いから、アダム、エバが神に背いた罪業は人

間を永遠に沒落せしめたであらう。

十二、教會の教父等は人間が一個の動物であつて、而して其の父母の性質を承け繼いだものであるといふ事實に其の說の基礎を置いた。夫れだから彼等は人間が本來の性質から云つても、組み立てからいつても一個の靈魂であつて、人間の獸的要素は此の世限りで滅ぶものであるといふ事實を認めてゐなかつた。動物としての人間は祖先の後を承け繼いで動物生活を營んでゐた。此點からいふと人間の王國は開闢以來其の動物性を子孫に傳へた獅子や虎や猿などの王國と同一の地平線上に在つた。

けれども人間には動物的生活以外に靈的生命の關係する事實がある。靈としての人間は彼を圍繞する靈的實在に働く者である。而して各人は皆一個の新たな原始人である。けれども動物はさうでは無い、今の象は昔の象の複寫である。再生である。象には始終變らない象の標準といふものがあつて、それよりも上

ることも無ければ進みもしない。猿もさうである。栗鼠も同じ事である。身輕に機敏に出來て居て嬉戲するあの栗鼠は太古時代と變つた事が無い。けれども人間は各時代を透して向上發展して來た。此れは人間が神の像に作られた自覺的な自己決定をなす、自働的な靈物であつて、其の地上の活動的な全生涯を通して、彼を取り卷いて居る無限な自覺的な、自己決定を爲して自ら働く所の神の靈に感應して來たからである。詩聖が

『日々は新たな原始である』

と歌つたが、神は吾々の本體に子供は皆新たな原始人であると告げる。

十三、グラスゴー大學のヘンリ・ジョンス教授は『社會改良者の信念』てふ論文の中に、スコットランド、グラスゴー市の官憲が毎年市の街路や居酒屋の酩酊者の膝元から澤山の子供を孤兒院に收容して居る記事を載せて居るが、其の殆ど全部が惡い親を有つた此の子供等が其の遺傳の爲めに受ける影響が何

んなであらうと訊かれた時に彼は『小さい時に收容するならば、其んな事は少しも影響しない』と云つた。

之れは統計に依る教授の主張であつた。即ち六百三十人の子供を送り出して數年間嚴密な觀察をしたが僅か二十三人の遺憾な結果を示した丈けであつた。而して其の善良な市民となり得なかつた者は皆何れも早く孤兒院に收容されなかつた者であつた。

トーマス・ジエイ・バーナルド博士は、神の像は凡ゆる人間に宿つて居る、而して靈的空氣の中で教授訓練が其の宜しきを得た子供は成人して必ず善良な男と成り女と成るといふ確信の下に、英國の都市の街路から六萬の棄兒を救ひ上げて智的な宗教的なそして實務的な教育を授けた、而して僅か其の中千二百人の例外を出した丈けで皆善良な市民に成つたことを彼は其の生前に知ることが出來た。

動植物の生涯は其の祖先の習慣や性質や特徴によつて解つて居る。けれども素質上動物的といふよりは寧ろ靈的な子供の生涯は兩親から承け繼いだもの許りでは解らない、其の家庭、學校、教會、社會關係から受けた教育感化によつて極まるものである。

事物の眞の本質は其の原始の性質では無く其の事物の性質の觀念が十分に發達し、而して其れが實現された後の性質である。とはアリストートルの教へた大眞理である。基督が幼兒を其の腕に抱き上げ、祝福して『斯くの如きは即ち天國に居る者なり』と云つた。彼は幼兒を本質的に可能的に考へた。彼は幼兒の本質の中に、靈感と教化によつて成長の後天國を繼ぐ靈の世界の萠芽を見た。彼は幼兒を祝福して何物にも優つて意義深い、貴重な財寶である事を教へた。若し基督に往き、基督に教化されて、基督に生きる時、總べての幼兒は基督の體の生きた部分を成すのである。

亞米利加共和政體中の凡ゆる幼兒は北米合衆國に生れたのである樣に世界中の幼兒は一人殘らず皆天國に生れて來たのである。茲に幼兒は合衆國に生れて來たのであつて合衆國が彼に來たのでは無い。而して幼兒が家庭、學校、社會關係を通過する迄は國內の事情がよく解らない。即ち最初彼の生れて來た國は彼の外部に存在して居る。而して彼の內に在る自我と外部の政府、法律、秩序、文學、美術、生活といふ事實との間に存する作用、反作用の過程に依つて初めて其の國情に通ずる。而して段々に外部の政治組織を學び其れを消化し其れに同化した時、茲に彼は其の表現となり、體現となり、生きた代表者となる。其の時彼は個性を具して、縮圖され、生きて呼吸する國其のものと成るのである。

其のやうに幼兒が生れ出た永遠の基督敎の世界は最初彼の外部に在つた。而して彼は祈禱、信仰、聖書、敎義問答、福音の敎化を受けて初めて其の內部世界に到達する。此處で學んだ事を消化し同化した時、彼の外部に存在して居た

靈の世界は其の內部の天國と化する。其の時彼は基督に居る許りではない、基督は彼に內住するのである。

中古時代の神學者は幼兒の概念を、其の想像から考へ出した。けれども科學的方法に從つて思考する學者は少年者の呼吸する事實の研究から其の學說を導いて居る。中古時代の見解に據れば、天國は唯神に選ばれた者の爲めに造られたのである。けれども少年者の呼吸する事實の研究から導いた學理に據れば、天國の扉は凡ゆる者の爲に開かれて居る。總ての者は其の知的、政治的、社會的、若くは商業的財產を受け得るやうに其の宗敎的財產を受ける事が出來る。

十四、オーガスチンの時代から下つて、ジョン・ウエスレーの時代に至るまで、人間が神の問題を考察するに當つて自ら案出した神學上の概念を今少しく考へてみよう。神の榮光を顯はさう爲めに、神の命令によつて、人間と天の使の或る者は永遠の生命に豫定され、或る者は永遠の死に豫定されて居る

といふのが其の觀念であつた。初は、永遠不變の企圖によつて、共に救に入らしめようと決した者を、滅びに止らしめる者と定めたといふのが其の理論であつた。けれども此の計畫は全然神の不條理な恩寵に基いて居て、全然人間の眞價に關係のないものである、而して滅びに殘された者は惡業の爲に永遠の苦惱に委せられたのでは無い、又永遠の天福に選はれた者は其純潔な信仰や善業の爲に神選に與かつたのでもない、といふ意見であつた。此の理論に依つて、神は其恩寵、正義の二つを保持しようと努めて居た。夫だから神は罪の恕しを乞ふた罪人を恩寵の力によつて、選民となした。斯うして其恩寵と榮光を維持した、けれども選ばれた者と何の變りも無い、人間の典型であつた。彼の神選に與からなかつた者は、永遠に焦熱地獄に悶え苦んで居た、斯うして神は其の正義を保持した。古への教父に依つて、榮光に入つた選民の胸に躍る至高至烈の歡喜は天の城壘に倚り、沸え返へる火の湖の中で、懊惱と絶望の間を浮き沈みする罪人を眺め下すであらう。而して此の悽愴を極めた苦惱の不斷の顯はれが贖はれたものゝ捷ち誇つた幸福に深さと艶を加へることであらうと。さう思はれた。

十五、斯うした人間の慨念、選民に對しては愛も情も籠つて居るが、非選の罪に惱む者に對しては冷淡な、無慈悲な、殘忍な神を神とする概念は、丁度熱の古い理論が熱の事實を遠ざかり、天文の古い學說が天體の本質を離れて居た樣に、當時敬虔な人を支配して居た學說でさへも、全然人間と神の眞相を離れて居た。結局自然、人間、神に關する當時の學說は事實や物質や人性や神性といふものに關係なく組み立てられて居た。

宗教の事實は自然の事實の樣に明確なものである。而して自然の事實の樣に類似關係を表はす。從つて物質的事實の中に見る樣な明瞭な、判然した思想を含んで居る。けれども夫れは科學的方法に依つて穿鑿されなかつたから自然の事實の樣に十分に其の內容が闡明されて居らない。

十六、宗教は、其の一半が人的な、他半が神的な要素から構成されて居る所の一個の結合的事實である。宗教の人的要素といふのは、

（一）　人間以外の、而かも人間に關係のある、目に見えない、而して人間よりも高い力に信頼する心である。此の目に見えない持續的な力を呼ぶ信頼心は、良心の働を伴つた想像や感情から生ずる。此の心は、原始時代の人が河を渡るに使つた小舟に對するやうな、暴風雨を避ける爲めに這入つた洞窟に對して持つて居た樣な唯の信頼心ではない。夫れ以上のものである。人間を取り卷く事物が單に描出し、榜示して居るばかりの神秘な力に仰ぎ倚る心持である。而して人間は、周圍に樹がある許りでは無い、其の樹の後に何かしらん斯う變な物が居る、其れは人とも思へる樣なものが附き纏うて居て、いつも人間に暗示を與へて居る樣な感じがする。此の無邊な恐ろしい何物かが暴風雨の中から呼ばはる。雷の中に其の聲を轟かす。太陽の燦々する中に其の顏を顯はす。稻妻の

中に其の激怒を閃かす。玲瓏とした月に其の穩かな情調を映す。而して岩間に眠り、河に流れ、山嶽に立ち、瀧に歌ふ。夫れが獅子と哮え、鳥と飛び、花と開いて蔭深い森に憩ふ。自然の萬象は此の力に依つて生きて居る。生ある物、無生の物の內部から、人間に向ひ、人間に見入つて話し掛ける其の不思議な力は何にもあれ、原始時代の人間は其れに知られ、其れに嘉賞られ、其れに咎められるやうな氣がして、其の靈妙な物影が、人間の幸福を支配して居るやうに感じた。此の不可思議な『者』と親しく交つたならば何よりも我が幸福を齎らすのでは無からうかといふ雲を摑むやうな、霧を隔てゝみるやうな考が漠然其の心に動いて居た。

十七、（二）　其れは信頼心に結ばれた、未開人も文明人も有つて居る見えない力に對する義務、責任の感じである。人間は其の力の前に平屈る。其の力に祈願する。其の力に獻祭を供へる。祭壇を高めて其の力を拜む。而して人間が

信賴し、責任を感じて居る此の見えない神秘な力を喜ばせ、而して宥めなければならないといふのが、其の確信である。原始時代の人間も、進歩の活舞臺を躍り進む人間も、常に自分を取り卷く力に和解を試みて居る。

信條は變り、
世相は總べて更まらん、
聖なる木立、寺、教會、
其れは建てられて、
朽ち遂に倒れん。
種族、國民、異邦の民は
來往し、銘され、數へらるゝも、
年を重ね、世を經るまに、
いつかは忘れられん。
總ての物は、其の姿を
更むる事もやあらん、
さはれ、昔も、今も、
心の奥に、其の願事を
叫びて、變ることなき神に
祈らぬ者は、あらじ。

十八、宗教の神的要素は

(一)『見えざる者』が自然を透して成した自己の顯現である。世界の原始から、外界の事物と力が結び付いて一種の文學を形作つてゐた。而して或る大なる實在が其の文學を通じて自らを默示して居た。

事物の後に附いてゆはる神秘は山や木立や川や空を透して何を語らうとして居たが、原始時代の人間にはよくは解らなかつた。けれども彼は其の默示の意義を捕へる爲めに其の想像や感情や良心を切りに活動させた事は疑が無い。何よりも其の自然の儘の奇異な宗教は、萬物の後に潛んだ力を彼に語らつた感想を證明して居る。彼は此の宗教感を起さしめた、『見えざる者』から來た觀念を鳥の中に見た。天上の星羅や周圍の森林や河海の水は彼が信賴し、責任を感ずる所の『者』が表示した觀念に滿ち滿ちた、偉大な多くの言語であつた。今日の科學者が事物の意義を多くの實例によつて確實に知つて居るのに反して、當時の人間は事物が何か深い意義を有つて居ると感じた丈けであつた。之れが近代の自然研究者と異ふ所である。近代人は包を釋いて其の內容品を見るが、原始時代の人は何か內に容つて居るらしいやうな包の風袋を見た。彼は萬象といふアルファベットを見たが其れを讀む事も綴つて言葉にする事も知らなかつた。

世の中で認められた哲學說や宗教上の教義を顚倒せしめて喜んで居つた彼のニイチェでさへも、人間は永久の轉成であるといふ識見を持つて居た。彼は云つた、『重大な何物かゞ將に起らうとして居る、何物かゞ準備中である、而して人間は……一の幕間狂言である、橋梁である、大なる囑望である、と斯ういふ興味、感應、希望、否殆ど確信を人間は自分で喚起して居る』之は確かに、常に人間に眞理である。野蠻人は、教育といふものが無い時には、文明人であつた。彼はダーウイン以前には幾千年といふもの科學者であつた。彼は算數、讀書、習字、暗號を學ぶ以前には立派な人間であつた。而して彼は斯う云つて神を讃美する以前には敬虔な宗教家であつた。——

日を仰ぎ見る野花の
光と穹窿を見ぬことやは、

あゝ、神よ、我が神よ、
吾は汝を仰ぐ、
永久の日の帳に隠れたる御姿を。
恩惠の雨に潤ふ蕾の
雨と虹霓を否み得べきや、
不幸に幸に吾、神に感知れど
無邊の虹を隔つる彼方なれば。
オリオンよ、月よ、日よ、虹よ、
見えぬ、くしき穹窿よ。
吾は知る、汝が居る其處に、扉見えねど
神の王國のある事を。

十九、彼は斯ういふ美はしい祈禱文を筆に表はしたホイッテアの粗尤な先人であつた。

靈なる神秘の國が
近く我等を圍繞り、聖なる力の國が
我等の世界を衝くさやかなる感じは
屢々我が靈魂と感覺に現はれ
低く小暗き地平線は霽れ輝き、
恐怖は消え失せて、
聖なる靈下り、
悲しみ、憂へ、迷ふ我等に
深き憐憫を垂れ給ふ。

ウォーヅウォースが斯う歌つた以前に、彼は當代の詩聖であつた——

高められたる思想の歡喜、
吾を動かす顯れを感じぬ、
森嚴の氣は、深く事物の
奥底に秘められて、
夕陽の紅なす光、圓らかなる大洋、
生命溢るゝ大空は夫れが宿りにして。
藍なす空と人の心の中に
事物の思想を推し進め、事物をめぐる
靈と力を我は感じぬ。

二十、（二）　宗教の神的第二要素は、神が人間の組織を透して成した自己の顯現である。原始時代の人間には、外界が彼の内部世界程不可思議では無かつた、けれども何れも自分より高い力の默示を含んで居ると思つてゐた。文明を織り成した萬物の一半が彼の内部に在つたが夫れはまだ發達して居なかつた。彼は實驗と試練を透し　一生懸命になつて其の内部の一半を開發し、生活や知識や宗教といふ外部の他半を見出して夫れを進展せしめて行かなければならなかつた。原始には内部も外界も一向に知られてなかつた。歴史は此の未知の兩世界が段々に現はれて來て普遍的宗教や正確な知識と成つて近代文明を形作つた所の記錄である。

人生といふ組織を透して成された神の顯現は、婆羅門教やゾロアスター教や儒教や佛教といふやうな大宗教となつた。萬物を神とする拜物教徒とは違つて此等大宗教の開祖は、人間の道德的な心意的な組織に顯現した神を見た。汎神

教の典型たる婆羅門教は思想を神として居る。ゾロアスター教や儒教や佛教は良心を神として居る。

宗教の人的事實を難ずる者は無い、神は不可知な者であると觀じたハーバート・スペンサーでさへも、丁度かの宗教學者が神は自己を顯現して居ると考へたと同じやうによく、此の人的事實を認められて居た。

『第一原理』の六十六頁に斯ういつて居る。

『常識は實在の現存を主張する。客觀的科學は此の實在が吾人の考へる所のものでは無いことを證する。主觀的科學は何故吾人が其れを如實に考へる事が出來ないかを示す、而かも尙ほ吾人は其の存在を考へさせられる、而して此の性質上全然不可知な實在の主張に於て、宗教は本質的に其れに一致する主張を見出す。凡ゆる現象は吾人に作用する或る力の表現と見ざるを得ない。遍在性は思索し得ないものとはいへ尙、經驗が現象の彌蔓に何等の範圍を劃しない以上、科學の批判が此の力は理解の出來ない物である事を吾人に敎へても尙ほ吾人は此の力の現存に範圍があると考ふる事が出來ない』。

此の文を解剖してよく讀んで見るとスペンサーは根本的實在を認めた事が解る然んならば夫れには實體がある。夫れが吾々に作用する。然んならば夫れには作用性がある。凡ゆる現象は其の表明である。然んならば夫れには力がある。總ての現象は吾人に作用する此の不可解な力の表明である。然んならば夫れには原因力がある。『吾々は此の力の現存に範圍があると考ふる事が出來ない』といふ中で彼は力に遍在性を認めて居る。然んならば彼は何かしらん此の不可解な、奇體な事物に實體、力、活動原因力、遍在性といふものを認めて居る。スペンサーが所謂『不可知』なるものゝ此等屬性を演繹すると同一の論法に依つて、聖書に啓示された神を信ずる基督者は神の智慧、恩寵、正義、眞理といふ屬性を演繹する。而して此の智慧や正義や恩寵や眞理の演繹法には實體

や力や活動や原因力や遍在性を演繹したと同じやうな論據がある。

二十一、スペンサーの哲學は（一）未知と不可知的（二）既知と可知的の二部分から成り立つて居る。彼は此の未知と不可知的に就いては餘り廣汎な議論に渡つて居ないが、此の暗黑な空隙から莊嚴な宇宙を導き出して居る。其の哲學體系の初めに於て餘り多くを知らなかつた者が何うして其の終りに來たつて、あゝも澤山の事を知つたか、驚嘆に堪へない事である。またあの限られた貧弱な絶對的な信條が何うしてあんなに長い包含的な相對的なものに成つたか彼は云つて居る『思索すればする程不思議に成つて來る此の神秘の中に唯一つの絶對的に確實な事實がある。夫れは、人間が凡ゆる事物を生ずる無限な不可解な勢力の面前に立つて居るといふ事である。』けれどもスペンサーは此の未知界を既知の世界に對せしめた。彼は凡ゆる現象は『未知』の表明であるといつて居る。夫れだから『未知』は既知の事物に自らを表示した以上、夫れは自己を顯現したのである。『未知』が自らを明示し、自ら語り出で、自らを體現して居る事を考へ、而して『未知』が自らを明示し、發表して可知のものと成つたといふ結論に到達する事を拒み得るであらうか。人間を知るには其の自己發表より學ぶより外は無い。幸ひ吾々には疎通する理解力がある、夫れだから吾々は其の行爲や其の言語や其の事業や其の外部の發表から人間を知るので、斯うして學ぶもの以外人間を知ることが出來ない。『未知』から出て來るものは皆未知の中に存在したものである。而して其れによつて其物を判斷し、其の性質や資源を鑑識するのである。夫れだから若し人間の心意が『未知』から出て來るならば、其れが人間に現はれる以前には『未知』に存在して居た事が解る。結論に無い要素は前提に無かつたと見るのが合理的である。樹に無い成分は幼芽中になかつたのである。スペンサーによれば凡ゆるものは『未知』から出て來たのであるから、凡ゆる森羅萬象は顯はれ出て吾々の目に觸れ、疑問を喚起

さしめる以前、既に『未知』の中に存在して居たのであるといふ結論に到著すべきである。

二十二、吾々が神を知るのは、神が創造した事物に表白された其の思想によるのである。而して吾々が有つて居る神といふ知識は實際生活に照して吟味する事が出來るから正確なものである。

人間は自然から受けた知覺と智慧を働かせて、神が自然界に秘めた思想を發見することが出來る、之れは人間がその思想を外部の形體に再現する事が出來るからである。人間は神の心意を分け與へられて居るから神が書き表はした事を讀む事が出來る。斯して人間は自然界に表白された思想によつて神を知つて居る而して人性は人間に神が思考する所のものを認識せしめる。人か、印刷されて紙表から得た知覺に理性を働かして、デヴイッド、カバーフヰールドの觀念を了得する時、彼は其の物語に表はれた思想を透してデケンスを知るのであ

る。

自然と人間が正確に了解された曉に、吾々は夫れを透して直接に其の創造者の心意を窺ひ知る事が出來る。吾々は『アイヴァンホー』や『ミドロシアンの心』や『ケニルウオス』を透して、サー、ウオーター、スコットの心意を洞見する而して夫れと同時に吾人自身の心意を見る。神の二大書は人間と自然である。而して吾々は之を透して神を見ることが出來る。此の二大珍本の著者の知識は、此の本の知識を得たと同一の方法によつて得られる。吾々が此の自然てふ本を繙く時に創造者を直覺する。凡ゆる知識は直覺や直觀に始まるものであつて何れの時代に於ても人間は自然から得た知覺と自己の理解を通して神を認識するのである。

理性は、此の世界から得た離れ離れな知覺や人間に就ての離れ離れな知覺を一般觀念と成すやうに、心意は神から得た區々な知覺を一般觀念や概念に組み

立てる事が出來る。人間が色々な時代や風土や文化を透して、神を認識して來て居るのに神の存在を否定するのは、人間が精神錯亂をして居ると責めるのである。而して若し實際に神の本體が見えなかつたのに、創造者の幻を見たと人類が始終信じてゐた事が精神錯亂であるといふならば、其の否定は價値の無いものである。

二十三、人間の神に關する知識は、證明の出來得る確實なものである、夫れだから科學的である。之れは人間が神の特質を賦與されたからであつて、啻に物質から得た印象で觀念を形成して全能者の思想を捕へる許りでは無い、觀念を得た物質中に再び其の觀念を體現せしめ得るからである。ハンデルには海の咆哮や風の呻吟や颶風の激怒に縺れて混つた音樂が聞える。彼は其れを心に組織立て、其れを曲調に變化させ之を奏てゝ美はしい旋律を漾はせる。樹々を鳴らす風・岩に碎くる浪、崖を叩く大海、森に裂かれる稻妻が響かす音樂は、神が人間を透して奏でる音樂には比ぶべくも無い。大海原や海岸や森や鑛石から轉び出た音符が一度び此の響應し感動し易い樂人の靈魂に落ち來り其の靈妙の技に生きて、聖歌と成り神樂と化した時、自然の音樂は清淨され、精練されて意識に上り、人間の歴史を飾る凡ゆる歡喜や悲哀や希望や失望や愛や薄命の色彩に織られて其の深さと高さを增した神の音樂と成る。勝敗に人の靈を惱ます大戰爭も變じて歌と成る。無限の調和の音階は、人間の靈魂に來つて有限の調と成り、而して世を惱ます雷が變じて旋律の波を震はす。ストラデヴェリアスの樣な人はヴァイオリンを透し人生の悲痛と懊惱を移して勝利の讃美とする。バデレウスキはピアノを吾と燃ゆる太陽との間に置いて、彼は凡ゆる調和の創造者と一族である事を示す。彼は其の樂器によつて目に描き、耳に呼はり、人を携へて無邊の景色にあこがれ、深邃の谿谷に下り、不思議な山嶽に攀ぢ、無限に擴がつて人間の靈魂の際涯もない領土に逍遙はしめる。

二十四、人間は、大音樂者の靈魂の奥底から捲き上つて來る大浪の流れに打たれて韻律の波動を漲らす世界に見出るゝやうな美はしい審美的な歡喜を決して他に求める事が出來ない。

調和の海から傳へた調音の波が憂の雲に閉された彼の心の周圍に漾ふ時は、忽ち悲しみが消え、疑が散じて論爭が止んでしまふ、彼は好調の流れ行く方へ何時の間にか、我を忘れて引き込まれる。彼は誘はれ、閉ぢ込められて破滅に瀕して居た海岸から漂ひ出て其の理想の國と永遠の住家の方へ漕いで行く。暫くの間囚はれの彼は、我にかへつて自ら漂ひ出でた事を覺るが、假令今自らは岩角けはしい賴り少い海岸へ漕いで行くのであつても、遂には世の初めから定められたあの輝く世界の港に着くのであると心の囁に勵まされて眞一文字に漕ぎ進む。

『何れの處ぞ、遙か、紫なす海に
理想の國の光り輝く
總べての船は錨をおろしぬ
我等も辿りてとく漕ぎゆかん』

『潮路をわたる靈魂の
靈妙の光に照されて
煩、悲、憂、ぬぐはれ
幻の世より携へ上げらる』

二十五、野蠻の民が打ち鳴らした銅鑼から、近代の樂者が奏づるピアノを生む迄は可成り永い年月を閲した。印度蛇の魔法と管絃合奏の精巧な音樂とは宵

壊の差である。けれども此の種の比較によつて、人間が呼吸し始めてから何處まで其の旅路を漕いだか、人間が何の位まで我が音響の世界を推し擴めたか、今更のやうに其れを思はされるのである。

ベトーヴェンが第九和絃樂を奏づる以前には、あの自然の儘の幼稚な樂器を用ゐて空氣を震動せしめて居た蠻民は矢張り隨一の音樂者であつた。嗚呼、第九和絃樂、此の莊嚴な調和の顯はれは神曲で無くで何であらう、吾人は凡ゆる旋律の本源から流れて來る聲調に抗する事が出來ない。

我等の靈魂は風琴笛にして
樣々の音栓節と調子を有つ
各〳〵其れに適せる音符ありて
離れ離れにはつまらぬものなれど、

結び合ふ時は調和を奏でて、
神の氣息を吹きならして、
人間の心魂に靈感を徹せしむ。

二十六、建築てふ名稱を與へられた美の崇高な形體は、鑛山に横はる大理石と人間が其れを建て上げてパーセノンの大殿堂と成した後の鑛石との逕庭を語つて居る。アテネのアクロポリス衞城に建てられた德の宮はフィデアスの靈魂の體現である。彼の宮が石の形體を取る以前には、フィデアスの心靈中に建つて居た、而して夫れがフィデアスの心に存在する以前には、永遠無窮の心意の中に存在して居た。ライン河のコローンに見る彼の莊麗な大建築は、完成以前六百三十年にあれを畫策したメイステル、ゲラルドの靈魂の壯嚴な表現である。けれどもコローンの大伽藍がゲラルドの思想に描かれる以前には、夫れは無限

の心意中に存在してゐた。

『一言にして萬象を理解すべし、
即ち、神の懷に存在する眞理は
我等の胸に停まりて其の跡を印したり。
『彼』は斯くも輝き吾等は斯く幽暗きも
皆、『彼』の像に造られて『彼』を證明するなり』

斯うして人間が畢生の力を振つて造る事物は

『天界に於ける神秘なる事物の謄寫にして
更に緻密なる、明瞭なる、近接せる、
縫れ合へるものなり』

アゼンスに於ける殿堂や、コローンの大會堂の前には何人も皆降服する。げに古代希臘羅馬ゴシック式の建築に於て此れに優つた精巧なものは無い。彼等は其の解明し其の體現する所を盡して餘蘊がない。

何れの立場から見ても皆神の心意の表白であるといつてよい。夫れは、神の像に創造れ神の心意が有限に謄寫された心意を有つて居る人間が、其の手に成つた石の殿堂に人間自らを表顯する事を知らないからである、而してまた其れが斷じて出來ないからである。

二十七、人間を其の感受性や理性や再生力を透して宇宙の創造を企圖する神の心意の公道であると思ふ時、吾々は云ふべからざる偉大な人間の概念を與へられる。神は人間を透して凡ゆる物質的事物を醇化し、美化する。人間を透して岩石が移されては羅馬の聖ペテロとなり、色素が攀ぢてはラファエルの『變貌』となり、音響が高調されてはヘエードンの『創造』となり、言辭が轉ぜら

れてはテニソンの『イン、メモリアム』となり、而して遊星が變ぜられた時、荒野が花園と化する。而して皆之は人間が直覺と理性によつて神の觀念を組み立てゝ科學となし、心意の建設力によつて其れを創造の事物に體現したからである。啻に人間は世界を自己の中に受け容れる許りでは無い、彼は其の受け容れたものに自分の像と表書を印して之を外界に送り出す。彼は知る許りではない、創造する。彼は知覺し思考する許りでは無い、再生してそれを組み立てる。人間は、己が實體の創造者が無限に知り又爲す所を有限的に畫策して居るのである。

二八、ヴエナの街からペテログラードへ旅する者は露西亞の國境で汽車を乘り換へる。之れは國境内外の軌道が違うからである。けれども物質的事物や動植物が自然の王國と人間の王國を區別する境界線に到着しても彼等は何等乘換への必要が無い、彼等は同一の公道を通過して二王國間を來往して居る。斯の

やうに人間心意が自然の構造と適應して居るのは双方共に神意の顯はれである。自然と人間の本源が同一であるから彼等が一緒に成る時は合體し協力して科學を再生する。此の科學は吾々の理性が神の遣はした自然の事物に作用して像形つたものであつて神の顯現である。科學は一般に正確な、證明し得る知識として創造されたのでは無い、けれども丁度織物が創造されたのでは無くて機械が棉花から織り成したのであるやうに、創造者が其の思想を表白した原質から人間の知慧が組み立てたものである。心意が材木に働いて拵へた知識といふ家は、その家を拵へた心といふ挽材の積み重ねとは全く外觀が違ふ。人間の住家の原料は挽材工場で丸太から挽いた敷居や、床板や桷である、此等の材料が、感情や理性の働により、建築師の觀念に上つて、形に組み立てられなければ完成した家には成らない。而して出來上つた家屋は其れを組み立てゝ居る木材の寫眞では無い、木材其の儘の物では無い。けれども矣れは森を透し、

人間の理性を透して表顯した宇宙の心意に含まれた家の思想に似通つて居るに相違が無い。若し之が眞實で無いならば、人間は其の理性中に、萬有の後に潜む心意が備へたよりも優れたものを發見し、之を變じて暴風雨を避くる隱家を作り出す事が出來る事に成つてしまふ。住家は人間の理性と森林に顯はれた思想の間になされた結合の結果である。家は其れを構成する物質には全然似通つて居ない、けれども其れが正確な本質の表白である以上、其の理想的形體は有限界のものも無限世界のものも共に同一の物でなければならない。若しも宇宙の心意其のものが人間の心意中に限られた仕方で再現するならば、それは總べて前者の中に眞なる物は後者の中に在つても眞であり、總べて前者に於て美なるものは後者に於ても美であり、而して總べて前者に於て善なるものは後者に於ても善であるといふ事にならなければならない。吾人が科學に飜刻する所のものは、吾々が見、聞き、味ひ、觸れる世界では無くして、世界中に顯はれ、

世界を透して顯はされた其の思想である。夫れだから若しも世界が何等の心意を體現して居らなかつたならば、吾々は此の世界を透して科學を組み立てる事が出來なかつたのである。吾々が宇宙の事物に感情や理性を働かせて、得る所の眞の知識は、事物が含む思想を組み立てゝ眞理の實體と調和し之と同一なものとなした眞理の體系に過ぎない。

二九、一般の人は植物學者が花園の花から得た知識は、丁度寫眞師の種板に寫つた肖像が人間の顔の謄寫であるやうに、矢張り花其の儘の謄寫であると思つて居る。けれども地に生へた石竹や薔薇や百合花と、科學者の感情や理性が働いて其の想像に再生せしめた此れ等の植物とを比較すれば、森の樹と街路の家程の逕庭がある。科學の眞意義は神の思想が人間の思想に組み立てられたといふ事實に見出される。人間は全知の一部分を其の心意に移したのである。人若し完全に『純正理性の批判』に通曉するならば、カントが其の宇宙の

概念を表示した此の言葉から、あの哲學者カントの觀念を我が心意に移植することが出來る。斯ういふ人が若し『批判』を緻密に研究して得た事物の觀念を具體し得るならば、其れはケーニヒスベルヒの哲人の夫れと同一なものであらう。

三十、神は百脈根の叢籔一圓に百脈根の花を咲かせる。百脈根はたをやかな植物で、其れが南方の森を飾つて小さい輝きを添へようとする其の清い過程の途々に何の障碍にも邪魔されない。其のやうに人間が無條件に、身を挺して此の自然界に顯はされた神の思想に聽き自然界に働く神の意志に探り入り、自然を飾る美に眺め入つて、其れ等を發見し而して夫れを再現する時、其の再現された事物は、神の神意の表白であると同時に人間の心意の表白である。クレモナのヴァイオリンの老作者、アントニオ・ストラデヴァリアスは、神が彼を選んでヴァイオリンを作る一の道具と成した事を深く確信してゐた。ジョーヂ・

エリオットは、アントニオが其の熱心の餘り隣人に嘲笑れて居るのを見て、彼に云つた『アントニオよ、貴公は巧な陶工轆轤みたいなものです。年が年中さうやつて居るが幾らもする事があらうに。』ストラデヴァリアスは神が彼を選んで其の工をなさせるのであるといつた。其の時誰かゞ傍から云つた『何んだ、神樣にヴァイオリンが出來なかつたといふのか、え』。ストラデヴァリアスがいつた『左樣だ、ストラデヴァリの仕事は、神樣のお手におへなかつたのだ、これは私の仕事だ、……上手にして下さるのは神樣だ、けれども仕事をするのは人間だ、神樣は此のアントニオを置いては、アントニオ、ストラデヴァリのヴァイオリンを慥へなさる事が御出來にならなかつたのだ。』

三十一、ヘッケルのやうに神の存在を否定し、而して人間は物質が運動するに過ぎないものであるとし、而かも人間は夏の日の蟻や蠅よりも宇宙一般には取るに足らない者であると主張する學者は、思想が物質の腦髓原子の官能であ

るといふ事を敎へる。彼等は腦が、丁度肝臟が膽汁を瀘出し、身體の或る腺が唾液を分泌するやうな具合に、思想を再生する機關であると思つて居る。彼等の考では腦は丁度、胃が滋養物を消化して・血や筋肉にするやうに、印象を分類して思想に變化させるといふのである。此の見解に據れば、人間の心意に藏された文學、美術、科學、道德、宗敎は胃が分泌するあの胃液と同じやうなものである。而して膽汁が肝臟の機能であり、胃液が胃の機能であるといふ意味で、思想が腦の機能であるといふ所の學者は、人間の思想は實際腦髓に依つて生ずるものであるといふことを敎へる。

けれども制度、法律、文學、美術、科學を持つた文明に體現した思想が單に腦髓原子の滲出物であらう筈が無い。かの肝臟が膽汁を分泌するやうに、金字塔やダイアナの殿堂がモーセの像や、シスタイン會堂に於けるミケランゼロの壁畫や、ハンデルの『救世主』や、聖パウロの書簡や、聖オーガスチンの『神

の都』や、エマースンの論文は物質から成る腦髓の分子から分泌されよう筈が無い。人間が用ゐて、自然の外觀を變へ、河川に橋架け、山嶽を穿ち、鐵路を敷いて大陸を横らしめる思想は枯れかけて居る神經から流れ出たのでは無い。其は實に神が造つて人間の心意に謄寫し、而して神の子の偉業に體現した事物の中から發見されたのである。

三十二、ウイリアム・ジエームス敎授は其の小著『人間の不死』で此の物質的自然界に於て再生機能は吾々が熟知して居る唯一の機能では無いといふ事を敎へた。彼は此の本の中で蒸氣が湯沸の機能であり、光が電路の機能であり、力が落下する瀑布の機能であるやうに、思想は雷に腦髓の機能と見られる許りでは無い、丁度三稜鏡が光に對して傳達機能を有つて居り、オルガンの樂鍵が音に對して傳達機能を有つて居る樣に、腦髓は思想に對して傳達機能を有つて居ると見做すことが出來ると云て居る。元々光が三稜鏡の中に生ずるのでは

ない、單に其の中に傳導されて或る途と形にそこで制限されるのである。また空氣がオルガンに生ずるのでは無い、單に夫れは風笛を通して內に傳道され、而して調和音とされるのである。ジエームス教授は、靈魂不滅に關する、腦髓の機能に就いてのカントの觀念は傳達論に頗る近接して居るといつて居る。彼は肉體の死が實際心意の感覺的使用の終局であるかも知れないが知的使用の初めであると主張した、また斯のやうに肉體は『吾々の思考の原因では無からう、けれども、其の制限的條件である、而して假令吾々の感覺的、動物的意識には肝要なものであつても其れは吾人の純潔な靈的生活を阻碍するものと見做してよい』といつた。

シルレルは『獅身人面の謎』に同一の思想を表はした。ジエームス教授が彼の『人間不死論』に掲げた拔萃は頗ぶる肝要なものであるから、此處に引用した。

『物質は、其の包む意識を支配し、制限し、抑壓する爲めには驚く許り適當した機械である。……若しも其の物質といふ包被が、下等動物のやうな、下等な簡單なものであれば其れに透徹するのは僅か許りの智慧である。若し夫れが精巧な複雜したものであれば、細孔が、云はゞ意識の發表機關のやうに存在して居て、夫れが超越世界の實在を見透す不思議な光輝をちらほら見せるのである。而して之が唯物論に最後の解答を與へる。……唯物論は鳥の前方に荷車を繫いで居る、其れを轉倒にすれば物質と意識の關係が正しくなる。物質は意識を生ずるものでは無く、意識を制限するものである。而して其の有効度をある範圍內に限つてしまふ。有機物は原子から意識を組み立てるのでなく、意識の發表機關を限縮するのである。

此の見解に據れば『高きは低きを說明し、精神は物質を解釋する、而して其の結果不合理な說明に終らず、究極合理的な說明に到達する』

心意が思考する爲めの道具として思想を使ふ意味に於いて、腦髓を思想の機關と見做すことが出來る。けれども思想が腦髓の中に生ずるとか、或ひはまた意識が腦髓の內底に生ずるとかいふ人間の輕信は決して持續し得るものでは無い。

三十三、前章で述べたやうに、原子が自己意識・自己決定・自己活動を裝はされる時は驚くべき偉業を成す事が出來る。けれども、原子が人間の頭腦の內部に這ひ上つて、其處で不可思議な、廣大無邊な人間の意識を生むよりも遊星を築き上げる方が餘程容易かつたであらう。物質論者の主張は餘りに極端である。彼は殆ど穿鑿し過ぎて居る。

三十四、けれども、假令、自己意識や自己決定や自己活動といふ性質を賦與されても、尙、自らを破壞し・自らを創造つた精力を破壞せしめるやうな人間の意識を生作する腦髓の原子を信ずる事が出來ない。我が身を形成して居る分

子を用ひて、殉教者の火刑に自らを委する決心を成したニコラス・リドレーのやうな人間を分子が生作するとは、何うしても思へない。また自設、自働の心の機械が夫れを使用つて自らを燒き殺さしめ而して其の創造者をも燒き殺さしめるに至つた人間を造りはしない。かの使徒書を書き遂に其の確信が彼をして斷頭臺の露と消えしめた使徒パウロのやうな輝いた生命を地球上に存在せしめたのは彼の頭腦中に排列された原子其の物では斷じて無かつた。然り、夫れは恰も、ミシシッピーがロッキー山脈の雨と雪の中に其の源を發し、後に曲つて、水を合せ氷山を伴ひ、水勢を漲らして、遂に合衆國の地圖を貫流し去る夫れのやうなものである。腦髓が意識を作成するといふ事は啻に不合理な許りでは無い、夫れは少數の科學者が主張した何よりも狂暴な根據の無い臆說である。

ストラットフオード・オン・アヴオンの會堂に眠つて居る詩聖シエクスピアの

頭腦に嘗つては活躍した原子が、其の戯曲を世界に與へた驚嘆すべき彼の心意を斷じて創造りはしなかつた。

第六章　宇宙の理性基督

人間の心意は、其の凡ゆる觀念を匿まひ宿らせるのに三つの言葉を用ゐる。夫れは、自然、人間、神である。物質的宇宙といふ觀念は總べて自然といふ言葉に含められる。人類といふ觀念は人間といふ言葉に宿つて居る。而して見えない者、無限な者、永遠不朽な者といふ觀念は神といふ言葉に含まつて居る。此等の言辭が建てゝ居る國は廣大無邊であつて中々近寄られない、夫れだから人類は幾千年といふもの思索し努力して暫らく僅かに其の一少部分を踏査して居留したに過ぎない。

けれども、此等の辭によつて表明せられた此の異つた實在の秩序が眞實であつて、其れ等の觀念はカントの云つたやうに、凡ゆる思考の要件であるといふ確信は永いこと人間の心の奥底に秘められて居た。

自我の觀念、非我の觀念、及び此の二者を超越し、包含する統一の觀念は、凡ゆる思想の必須な根本的先要條件である。此等の觀念は、人間が最初有つて居た古い思想に、構成要素として入つた。而して夫れが今日最も進歩した哲學者が持つて居る斬新な思想の構成要素と成つて居る。自我が無ければ勿論何等思想を生じない。又、自我は、非我が無くしては何等思考する事物を發見しない。けれども自我はあり、非我はあつても、此の二者が表白されて居る所の統一に結ばれず、此の二者が相關して居る所の統一に支へられて居ない場合は矢張り思想を生じない。而して、自我と非我とが全然無關係で、何等共通の本源が無く何等響應する物が無いならば、其れは互ひに交易する事が出來ない。

二物間に存する關係は該二物が交易する根本的條件である。二者の依屬的關係は既に起原、本源の獨立的統一の明白な實證である。人間といふ自我は依屬的であり自然といふ非我は依屬的である。歴史は此の二者間に存する永久不斷の

關係を證明して居る、夫れだから思想の必至上、吾々は此の二者が從屬する統一體であつて、其の思想が此の二者を表白して居る所の神といふ實在があるといふ決論に到達せざるを得ない。鷄雛が地面を搔いた爪痕は人間に分らない。勿論鷄雛は何も人間に解るやうにと心して足跡を土に印したのではない。けれども人間に埃及の方尖碑に遺つて居る異樣な碑銘が解るといふのは、文字が心意を體現するからで、而かも心意は萬人に通ふものであるからである。人間に自然が解るといふのは、自然に心があつて、其の心が人間の心に通ふからである。夫れだから自然に體現した心意と人間に働く心意が合致することになる。これは自然の心と人間の心とは共に一つの無限の心の顯はれであるからである。

凡ゆる思考は、自然、人間、神といふ實在を必要條件として含む所の觀念を以て始まるやうに、凡ゆる思考は事物を解決する上にも此の觀念を持續する。スペンサー自身の意見によれば、此の無限の世界は萬象が因つて基く所の根本

的統一體であつて、而して此の無限界の意識は、凡ゆる吾々の知識の基底を成して居るといふのである。而して勿論彼は必要條件として含まれる所の客觀的世界の觀念と、吾々自身の主觀的生命の觀念が無ければ、何等の思想を成さない事を認めて居る。夫れであるから、心意の前に齎らされた凡ゆる問題が解決される爲めに、自然や人間や神といふ觀念の周圍に群り集つて居る事が解る。

何れの代に在つても、宗教と哲學とは、自我非我、及び此二者を包含する統一體に關係した不可思議を解決し說明する爲に寧日が無い。

一、宗教や哲學の價値は、人間の思想、經驗の根本的觀念を圍繞せる問題に解決を與へた曉に初めて定まるのである。思想經驗の領土を取り卷く問題に兜を脫ぐ所の哲學や宗教は人類の生長して止まない思想を解決することが出來るものではない。事物の理を解明しつゝある刻苦精勵の思想と獻身の生涯が幾百千年の霜雪を閱して成された堅實な進歩は、自然、人間、神てふ言葉に依つて心意の面前に齎らされた問題が決して不可解のものではないといふ人間世界に通じた此の確信に絕えず深さと廣さを與へて居る。ロッキー山脈に黃金を索めて粗金の顆粒を酬いられる間は、全山が探り盡される迄、其の發掘を繼續するであらう。眞理を索めて十分に報いられ、人をして尙進んで其の研究を繼續せしめた此の過去の事實程、今日、地球上に住む人間の確信を固め、人間の確信を永續せしめるものはない。而してまた學者は地球の衷心に掘り入り、其の傾斜を觀察し、其の隆起を實測して居るとは、誠に前代未聞の事實では無いか。彼等は天體に眺め入り、星辰を數へ、其の外觀を撮影し、其の內容を分析して居る、彼等は地球上の到る處を旅行し、人間を其の商業、其の法律、其の犯罪、其の癲狂、其の企業にあらはれた事實として觀て居る。彼等は人間の性質に含まれた宗教的要素を穿鑿し、其の表明や其の幾千年に亘る見えざるものゝ探索や、其の無限世界の切望を分類して居る。斯うして知識はこれまでに無く增進

して居る。既知の世界の境界は無邊に擴げられて居る。而して最早永遠に何物も其の境界の擴大には不要であるかたゞ眞理を探索めて止まない精勵と眞理の輝りはえる光に献げる至誠とを要する、此精勵と此の至誠は永劫に渡つて人間の高い高い叫びでなければならない。

二、自然、人間、神といふ觀念、即ち、非我、自我、及び此の二者を包含する統一體の觀念が原始時代の人間の最初の思想中に先要條件として含まれて居る間は、此等の、觀念が彼等人間によつて、意識的に捕捉され、若くは明晰な、進歩した意味に於て保持されて居たとは想像されない。此等の觀念は、始めには何等の進歩も無く、混亂して無差別に心意の中を浮遊して居るのである。

凡ゆる思考の先要條件たる自然、人間、神の觀念が、定義も無く區別も無く心意中に混淆して居る間は、文明は到來するものでない。內部の混亂が現はれ出て、外部の混亂と成らざるを得ないのである。

雷に此等思想の要素は明かに限定され、互ひに區別されなければならない許りでは無く、各々が適當の强勢を受け、而して心意中に外物から判別される位置に確と踏み止らなければならない。

印度哲學に於いては、神が餘りに誇張されて居る、神の觀念は、普通一樣の眞理を以てしては何物も神を斷定する事が出來ないといふ際限の無い超越的存在に押しやられて居る。

儒教に於ては、人間が誇張されて居る。人間の上の無限界の觀念や、下の有限界の觀念が明瞭捕捉されて居ない。夫れだから人間は其の適所を見出し得ず、天上天下何等の祐助無く此の世界に生存して居る。

ヘンリ・トマス・バクルの思想には、自然の分界が擴大されて居て人間と神の天地が頗る狹められて居る。

ジャン・ジャック・ルッソーは人間の關係する宇宙には全々超脱した自立の境

に高められた人間を見せて居た。

十八世紀の英國に於ける自然神敎に於ては、神がカーライルの所謂全能な時計師であり、此の世界は一個の機械であり、而して人間は堆積された麥粒のやうなもので互ひに夫れが機械的に關係して居る所の多數の原子であると云はれた。此の自然神敎には何等思想の要素が潜まされて居らなかつた、夫れは事實の眞の本質に觸れて居らなかつたからである。英國の自然神學者が語つたやうな神は存在しなかつた、而してまたあんな世界も人間も存在しなかつた。

三、宗敎と哲學とは總て一平面上に在るとも見られる。何れも同一事實を圍繞する問題の解決を求めて居るからである。

宗敎、哲學は、總て物質と力とを有つた同一の自然に對して居る。虛弱や悲哀や恐怖や無知や死を有つた仝一の人間に對して居る。萬象を圍繞し包含する同一の偉大な『實體』に對して居る。人間が索める物、また常に求めた所の物は自己

を自己と調和せしめ、自己を其の世界と調和せしめ自己を神といふ實在と調和せしめた所の自然、人間、神の事實を綜合した物であつて、即ち哲學である。斯んな綜合が人間の爲めに存在して居るのだといふ確信が、心臟の鼓動のやうに人間の心を衝いて來る。凡ゆる歷史、凡ゆる哲學、凡ゆる宗敎は、人間が幾千と無く斯うして綜合を見出さうと努めて其の中に憩ひ、而して其れを透して働いて居た事を證據立てゝ居る。

吾々が基督を宇宙の理性と稱へるのは、人間の生活を人間自身と調和せしめ、自然や神の事實と調和せしめる所の自然、人間、神の綜合を吾々の思想に齎らすからである。基督敎は人間の理性によつて組み立てられた宗敎では無い、人間の理性が實在の事實中に見出した宗敎である。人間は一個の思考者であるから眞理が必要である。人間は働かなければならないやうに成つて居る、夫れだから其の法則が要る。人間は心情を有つて居るから何か愛著する對象を要する。

人間は弱いから力を要するのである。けれども基督教は單に人間に眞理の體系を齎らさない、夫れは、人間が一個の思考者以上のものであるからである。また基督教が倫理の體系のみを齎らさないのは人間が行爲以上のものを要するからである。又感情のみを齎らさないのは其の心情の滿足を得る以上のものを求めて居るからである。而してまた、無限の力といふもの許りを齎らさないのは單に救助を求めて居るのでは無いからである。此等のものが充全した生命の統一中に結合され、調和されて齎らさせるのである。分離された眞理體系、切り離された倫理說、離れ離れに成つた力、此等は人間の要める物では無い。此等が完全な生命の調和の中に整へられて一體と成つて齎らされる時に人間の要求が初めて滿されるのである。人間は宇宙論では滿足されない、人類學では滿足されない、神學では滿足されない。人間の要求する所のものは、宇宙論、人類學、神學が我が物として生命の血に流れ、心臟に皷動し、心意に思考し、意

志に活躍する所の物である。人間は、我がうちに感ずる所の希望、力、抱負の萌芽が其の日々の實際生活に現實するのを何うしても見たいのである。學說は詩や哲學や神學の中に澤山に見出される、併し人間の叫びは一個の顯示を見出さん事である、啻に思索し盡した許でなく、其の爲めに惱み盡し、其を求め盡し其を生活に現し盡した者を求めて居る。斯した顯示を殆ど二千年も前に人間は見たと信じてゐた。

併し、彼等の思想が如何に誤られて居らうと、唯一つの事が承認される。即ち西歐文化の基底を成し、而して其の文明を築き上げた權威あり力ある要素を成した基督の生涯、其の死、其の甦生、其の昇天の大事實である。人間が若しも基督に於て、凡ゆる豫定の成就、凡ゆる眞理の調和、凡ゆる正義の充全、凡ゆる問題の氷解、凡ゆる美の顯はれを、見たと想つた事が誤謬であるならば、夫れは凡ゆる歷史を通じて最も驚嘆に値する誤であると斷言してよいと思ふ。

何故なれば此の誤謬の光に携へられて、人間は太古近代を通じ、最も輝いた合理的な文明に到着したからである。

四、基督が、今日其の比類ない、獨歩の位置を人の子の間に占めて居る所以のものは外でない、彼は單に說明し、敎訓し、或は哲理を究め、理論を作り、詩作を爲す爲めに此の世に來つた許りでは無く、其の充溢した生命によつて、人間が自然や人間自身や神の中に見た所の問題を解決せんが爲めに來つたからである。

人間が思索によつて闡明しようとした神秘を基督は其の生活によつて闡明した。而して罪の子等の撞着した惱みが大きく成つたのを見て普通の生活を繼續するに忍びなかつた時、彼は自らを死に委ねた、而して後墓より甦へつて人間に凡ゆる眞理の本體を與へ、凡ゆる正義の歸結を與へ、凡ゆる愛の効果を與へ、而して凡ゆる時と永遠の秘密を與へた。

凡ゆる思想と生命の基を成す有限世界、無限世界の對隅が、化身によつて一個の不可思議な人格的實在の事實に結ばれた。カントの言を以てすれば凡ゆる思索の先要條件として含まれた觀念は、化身によつて一體と成り、而して個人生活といふ具體的統一の中に調和された。之は、機械的な哲學者が定めた貧弱な標準から、人間の知識を、有機的な無窮な實在の不變な高い標準に擧げた。基督の十字架によつて、人間は互惠、合同、宇宙的友交の秘訣を敎へられる。基督の生涯に於ける此の悲劇は、局部的地方的肉體的な、離隔された自我の死に依つて人は團體及び國家の中に一體に結合さるべき事を敎へ、而して基督の敎會及び國家の生命は單に呼吸する生物が群集して出來た聚合體では無く、全體を通じて一個の生命が鼓動して居る總合體である事を敎へて居る。而かも其れは個人の生命を破滅せしめ、併呑する生命で無く、各個人の獻げた小さなる生命に對して、全體の大なる生命を返し與ふる所のものである。彼は孤立的なる

生命を棄てた時に初めて己が生命を見出したのである。大都市に於て、個人が都會全般の幸福の爲めに利己的な、個人的な、局部的な權利を讓歩する事に依つて、一層大なる生命に入るものである。都會全般の幸福、秩序の爲めに、森の蠻人が有つても居りそうな或る種の權利を讓るので無ければ都會の生活は不可能である。蠻人が森に於て有つて居るやうな所謂權利を各人が振りまはして都會に生活を營んだならば、其の結果は自由を齎らさず、渾沌と全滅に終ることであらう。耶蘇基督の死は、人の生命が一般の福祉の爲めに獻ずべきものである事を吾々に語つて居る。基督は彼が人間の幸福の爲めに必要であると見た社會に人間を伴ひ來らうとして遂に十字架上に救の血を流した。

基督は其の化身によつて無限の過去と有限の現在てふ對隅に見出された二つの名辭を結び付けた。其の甦生に依つて、歴史的事實の中に無限の未來と有限の現在てふ對隅に見出された二名辭を結び付けた。而して其の昇天に依つて生命に勝利を與へ希望を與へた。

五、偖、吾々は違つた方面から此の問題の穿鑿に歩を進めてみよう。吾々がよく注意して物質に視入るならば外圍は其の内部の物質に影響し、物質は又其の外圍に影響するとを見出すであらう、事件と外圍の事情とは互に斯く影響して居る。斯ういふやうにして吾々は因果關係に到着する。而して因果律は時間空間以上の深い事實である。原因が影響の潮流を送り出して其の結果を齎らす爲めには空間と時間が無ければならない。けれども原因が結果の中に自己を表白する前に其の表白せしめる力を先づ分離せしめなければならない。斯うして我々が見るのは自己原因、自己分離、自己活動である。自己作因的な自働的な全能な勢力は宇宙の最も深奥な事物で、最元始の事物である。これは凡ゆる因果律あらゆる時間あらゆる空間、凡ゆる經驗の必要條件として含まれる原理である。此處に吾々は自我と非我を包含する所の統一體を見るのである。此れは

かの印度教者の物質界を離れて生存する純淨な實在に響應する一個の抽象的な無感覺な空虛な無味な統一體では無い。內に宇宙一切、凡ゆる知慧、凡ゆる生命、凡ゆる愛の財源を含蓄する所の動勢的な、自働的な、自己相關的な統一體である。而して自己作因的であるから同時に本體である、對象である。自働的であるから生きた理解力を有つた統一體の原因であり、結果である。自己活動自己因果、自己相關の完全な形體は自己意識である。自己意識は內に思考する主體と思考される對象を含んで居る。而して亦、生きた理解力ある人格的存在の主體客體の本性をも包含して居る。

絕對完全の實在が思考する所のものは存在しなければならないといふ事は、凡ゆる深遠な哲理や神學の確說と一致して居る。夫れは、絕對完全の實在の思考力と意志力とは同一物であるからである。若も絕對完全の實在が思考する所のものが同時に存在しないとしたならば、彼は或る物を思考して他の事物を決定

するか、若くは空想即ち現實しなかつた思想を有つて居ると思はなければならない事になるのであらう。

また絕對完全の實在が有つて居る思想は、實在と等しく絕對的な、完全なものでなければならないといふ事は最も深遠な哲學や神學の洞察と一致して居る。

印度教者は世界が幻想であるといふ。彼等は絕對完全な實在が不完全な世界を造り得る筈が無い、確に世界は完全な實在に依つて創造られたのでは無いといふ。從つて其の絕對完全の實在は事實上存在しない。斯うして彼等の概念は無意識に近い狀態の涅槃を索めるようになつて居る。基督教の哲學及び神學は、絕對完全の實在は直接に不完全な世界を創造らないといふ思想を認める。新約全書に於ては、三位一體の第二者たる子なる神が世界を創造つたといはれて居る。『世は神の道に依つて造られたり』。ヨハネがいふ『太初に道あり』、

『萬物は彼によりて造らる』『彼世にあり、世は彼に造られたるに世は彼れを識らず』。また希伯來書の冒頭に神は『この末の日には其の子に託て我儕に告げたまへり……且彼を以て諸々の世界を造りたり』。即ち『己が權能の言をもて萬物を扶持つ』所の者は『子なる』神である。

六、神の絶對の自己意識中には、主體客體と神の人格的存在に於ける、主客兩體の同一が存在する。けれども其の絶對主體が思考する所のものは必然的に存在して、夫れが絶對主體そのものゝやうに完全でなければならない。また其の絶對主體と絶對客體とは一つでなければならない。神の自己意識に於て其の絶對主體は父なる神であり、父なる神の思想即ち絶對客體は、子なる神である。けれども子なる神は父なる神と同じく完全であるから、其の考ふる所もまた完全でなければならない。

父なる神には、超越存在の觀念がある。それであるから其處に唯一神教の眞理がある。子なる神には內住する神の觀念がある、其處に多神教の眞理がある。聖靈の神には世界に行き亘る神の觀念がある、其處に汎神論の眞理がある。斯うして吾々は、何物をも生じない抽象的な無感覺な一神教に偏せず、また、神を貶する多神教に陷らず、而してまた神を引きのばして總ての特徵を沒却せしめる汎神論に傾かず、單一な神と三位一體の神を奉ずる所の概念が與へられる。

此處に吾々の奉ずる三位一體は法廷に於ける三人の裁判官より成立てるやうな種類のものではない、また、感知し得る形體を有する三つの事物が組織したやうなものとは違ふ。三法官や斯うした三事物間の關係は機械的な偶發的なものであつて絶對的な本質的なものでは無い。基督教會の三位一體は單に三個性の聚合體でもなければ數學的な三點の統一體でも無い。基督教の聖書に顯はれた三位一體は差別を通し差別に依つて具體的の統一を成せるものである。此

の三位一體は空虛といふ特色でなく「豐富」特色を有つた統一體である。眞實な實驗的な、識り得べき統一體を構成して居る三位一體である。神は聖書に智慧、生命、愛として顯はれて居る。而して各の生ける作用は皆な三一的である。智慧といふ官能を有つた自我の名辭は主觀客觀及び此の二者の有機的同一の三つになる。斯うした自我の名辭は必ず三つであるが其の性質は必ず一つである。

七、若し神が睿智であるならば神は三位一體である。夫れは睿智の過程が三一的であるからである。自己意識の無い心意はあり得ない、而して永遠な自己意識の客體は、永遠な心意の充全した表白たる永遠の理體である。けれども永遠の心意は彼の客體たる理體に入つても必ず主體としての自己に歸つて來る。完全な自己意識は必ず出て行つて歸つて來る。若し永遠の心意が主體たる自己から出て、客體たる自己に入り而して最う歸らないならば、其れは自己を主體としても客體としても意識して居ない事になる。それで、心意の運動は其の有

限無限何れにしても、絶えず自己から出て行つて復た自己に歸つて來るといへる。斯うして連續と同一が持續される。而して自己意識の全體の働は非時間的に永遠に完全な過程である。

時間空間は自己意識の完全な働にとりて必要なものでは無い。

時間空間が若し、自己意識の二名辭、即ち主觀と客觀との間に來るならば、同一と人格とは永久に破壞される。之は神と人に就て眞理である。有限の人が自己意識的たる間、彼は永遠の中に生きて居る。時間空間は事件や事物を制限するけれども自己意識を制限しない。自己意識は非時間的な非空間的な靈魂の生きた官能である。

カントに依れば、自然、人間、神の觀念は凡ゆる思考の必要條件として含まれて居る。けれども人格的な三位一體の神の觀念は凡ゆる思考の必要條件として含まれて居るといふ事が更に深い眞理である。ハーバート・スペンサーが斯う

いつて居る。『考ふれば考ふる程不思議になる神秘の中に唯一つの絶對確實な事實が存在する。夫れは人間が萬物を生ずる無限な、永遠な力を經驗して居るといふ事である。』

八、スペンサーの所見に依れば無限不朽の不可解な力は、凡ゆる思考の先要條件である。けれどもスペンサーが不可解な力とする所のものを人格的な理知的な神とする基督教會の見解は更に合理的であつて、更に實在の事實に合して居る。此の見解に依れば、吾々は汎神論によらずして神の造つた世界を識る事が出來・多神論によらずして神の創造つた人間を知り、一神論に從つて神に歸るとが出來る。此の見解に依つて吾々は、其の子に自己を與へ而して人類に其の愛を分けて贖ひをなし聖靈を通して自己に歸つて來る愛の神を知ることが出來る。此見解によつて吾々は、意義と條理と目的とを藏せる永久の行列を見るのである。

之に依つて吾々は、人類の宗教的抱負を明かにする所の神の觀念を與へられる。吾々は處、時代、風土を問はず人間が神を慕ひ喘いで居るのを見る。人間は何れの方面から見ても其の根本から宗教的である。夫れであるから宗教的溝渠が最も深く其の性質中に掘り成されて居る。吾々は神の心意が出て其の獨り子即ち三位一體の子なる神に入り、而して其れが子なる神を通して人間に入り來つて神の思想が其の最高最終の表白となるのを見るならば、人間は宗教的であることがよく解る。人間の基礎的な構成、人間の目に見えない骨組、人間の理想的な圖面と典型は基督者である。神の力が其の中に潜まつて居り、其の心には永遠無窮の基督が芽萠して居る。子なる神の思想の究極有限な表白であつて、子なる神の普遍的な性質を賦與されて居るのであるから人間は神につぐ宇宙の最高者である。このやうに人間は其の骨子根柢から全然宗教的である。而して人間の眞の職分は時代を通じ、永遠を通して、人間が三位一體の神の最高

な創造として受け納れる子なる神の普遍的な本性を實現してそれを擴充する事である。

九、此の見解は、人間の靈魂が不滅であつて、永遠に生長發達し得るものであるといふ歴史を通じて人間が有つて居た確信を説明して居る。夫れは、靈魂不滅其のものが永遠の生長であつて命ある進歩に外ならないからである。人間に無限の深さを有つた根源がないならば、吾々は時に暗雲に閉される靈魂不滅の信仰を不變の光明に照される事が到底出來ない。人間が生きた無限の靈の富源に結ばれて居るといふ感じがなかつたならば、靈魂不滅の觀念や希望は幾世紀の過去に其の心意から滅び失せてしまつたであらう。人間は『神の子』の思想の最高な顯れであつて、『神の子』の性質と其の靈性を受けて居るのであるから、神の無窮な性質に等しい無限に深い起源と豐饒な富源を有つて居る。人間の由來に關する此事實は、人間の宗教的意識の事實を説明して餘りあるものである。かの使徒パウロは之に關し基督者を『神の後嗣にしてキリストと偕に後嗣たるものなり』と云つた。またエペソの教會へ贈つた書に『我儕をして皆、……全人即ちキリストの滿足れるほどと成るまでに至り』といつた。基督の性質を繼け嗣いで居らない者が何うしてキリストの滿ち足れる程と成るまでに至る事が出來ようか。キリストに劣る性質、キリストよりも低い性質、其れ等は滿ち足れる程と成る事が出來ないのである。

此の教義はまた吾々に、人間の道德的な意識と理知的な意識を教へて居る。人性は二重の組み立を有つて居る。即ち人性は思想の原理と意志の原理、眞理と正義といふ二原理の統一體である。物質的實在としての人間は二重組織に成つて居る。其の物質的自我の主觀の側は飢であり、其の物質的自然の客觀の側は食物である。而して人間が物質的實在として生存するに當つては、飢と食物が一緒にならなければならない。

理知的實在としての人間は二重の組織である。彼は主觀としては理解力であり、客觀としては眞理である。夫れであるから智慧や知識が存在する前に理解力と眞理が一緒に來なければならない。道德的實在としての人間は二重組織である。彼は抽象的意志としては主觀であり、抽象的理法としては客觀である。夫れであるから人間が道德的なものとなる爲には意志と法則が結ばれなければならない。人間の物質的性質の客觀の側は人間以外の、人間が食ふ食物の中に備へられて居る。而して人間の理知的性質の客觀側は人間以外の、聖靈に備へられて居て、人間を眞理に導くのである。

人間の道德的性質の客觀の方面は人間以外の、聖靈に備へられて居て總べての正義に到る途を照らすのである。

偖、人間は其の心的方面に於ては自由を感ずる。けれども物的方面に於ては服從して居なければならないといふ事を感ずる。人間は何うして同時に此の自

由と此の服從を兩立せしめようか。吾々が、人間の性質は『神の子』の性質の再現であり、而して聖靈は『父なる神』と『子なる神』から人性に流れ入つて之を照らし、之を覺醒し、罪を悟らしめ、而して尙ほ之を新たにし之を再生し之を組織的一完體となして基督敎徒と成す事を思ふならば、聖靈が人間の智力に賜ふ眞理は、食物が其の飢に對するやうなものであつて、聖靈が人間を勵まして服從せしめる法則は、人間の性質にある法則であるといふ事が解る。其のやうに聖靈が人間を導き入れる眞理を考へ、聖靈が人間を推し進める正義を欲するのは、人間が自分の眞理を考へ、己が正義を欲して居るである。――即ち、人間は己が本質に從つて思考し、欲求して居るのである。斯うして單に眞理を語り正義に組することによつてのみ人間は自由を得るのである。人間は正義を破る時に隷屬の身と成り、遂に渾沌世界に自らを投じてしまふ。

十、聖靈は基督敎會の運命を導いて、之を推し擴げて行く人格的存在である。

夫れであるから、人間は宇宙的な、本質的な、靈的な、對象的な自我を聖靈に見出す。聖靈の中には高い、普遍的な生命がある。夫れであるから、人間が聖靈に生きる事によつて一層高い尊い自我に生きるのである。

此の教義は自然の中に見る秩序、漸々に低い所から高い所へ登る段階を說明して居る。吾人は、原子、礦物、植物と次第に人間が下底から頂上へ順序正しい段階を登つて行くのを見る。而して力が、各々に適應して此等の分離して居るものゝ上に見出される。而して總べてが思想の理法に從つて居るやうに見える。而して實際皆思想の理法に據つて居るのである。『子なる神』が永遠に『父なる神』から出て來る自己を、最初は三位一體の父なる神に對するやうに純潔な忍從的なものとして考へ、決して能動的な絕對的なものとしては考へなかつた。斯うして『子なる神』の思想の働は不完全な有限な凡ゆる段階を通り、人間に到つて神の宇宙的な、能動的な本質を、神の性質を有つた實在の創造に現はし、而して神の像に自らを顯現した。原子、礦物、植物、動物のやうなものには勿論、聖靈の働が認識されない。此等のものには意識が無いからである。此等のものゝ上に作用する聖靈の働は、重力、化合力、電氣等の名辭に定義されて居る。人間に至つて聖靈の顯はれが人格的な意識的な顯はれとして認められる。而して人間は、己が生命から出て善となり惡となる思想と行爲を認識するのは、此の到る處に瀰漫した人格的な聖靈の顯現によるのである。

十一、最後に此の教義は、吾々に、自然や人生の王國を通して何處にも現はれて居る奮鬪、葛藤、苦惱の意義を敎へる。ライプニッツの樂天主義、ショペンハウエルの厭世主義は事物の深い眞理に何等の根據が無かつた。神の意思が動き出て『獨り子』を通して有限の世界に入り、また此の有限の世界を滿し勵ます聖靈に入り、而して世界の頭上に基督の教會を創立てる事を思ふ時には、神意の全活動が行列を成して働いて居るのを見るのである。此の見解に依つて

吾々は、靜止した、死んだ神の意志でなく、活動的な生きた神の意志を見るのである。斯うした行列が、活動や奮鬪や爭鬪や苦痛や懊惱を含んで居るのは、皆な其の意味がある、即はち自然の呻吟は産の苦であり、人間世界の苦鬪は、將に生み出さんとする高い生活への努力である。春先の寒風も夏を待つ心にはよく耐へ忍ばれるものである。

神の行列が、時間と空間の限界に入るとは、原子間に生ずる波瀾と努力、不斷のかち合ひと奮鬪によつて示されて居る。此奮鬪は凡ゆる組織の舞臺を通して繼續され、遂に吾々が人生の野に達すると其れが叫喚となり、哀哭となり、悲劇にあらはれ史詩に飾られ、連禱に上つて、最も興趣ある人間の文學と成るのである。

此の奮鬪に『人の子』たる『神の子』が入り來る。彼は此の奮鬪と邂逅し、之に耐へ、之を征服し、而して十字架に磔けられた。彼の十字架は、原子に出發して自然の凡ゆる過程を通して續いた試練と狂瀾と奮鬪の頂點である。基督が死より甦つた時に、清淨と永生に至るの途は苦難と克己と十字架であるといふ萬代に通ずる眞理が定義された。贖はれた人性は、其の時から人類を支配する假定と成り理想と成つた。これによつて神の凡ゆる活動は宇宙の理想的組織、圖面、理體、また理性たる耶蘇基督に在る人類の體制を目指して居る事が了解される。

第七章　科學的宗教たる基督教

人性は宗教よりも古い裝置を內に宿して居らない。人間が創造者に受けた生命は宗教に貫かれてゐた。彼は或る意味から云へば他の萬物に勝つた無限に高い神の工人であつた。生けるものゝ中で人間のみは善き事の爲に創造られてゐた。或る樹は林檎が實るやうに定められて居た。けれども其果實は屹度樹の頂上で成熟した紅の色を見せ、其の美は樹が生ずるのでは無くして自然によつて色彩けられたことを感ぜしめた。

蜜蜂は蜂蜜を集めるやうに定められてゐた、けれども花の中に見出す糖分は彼等の本能と相依れるもので、此の良き企は蜂によつて決められるので無く蜂の爲めに定められてゐた。人間はあの樫が橡子を生ずるやうに、眞に良い業を爲す爲に創造られた、けれども樫のやうに外部の力によつて天の善事に從ふべく

强ひられなかつた。蜜蜂は外界の壓迫と內部の結構によつて其特殊の業に閉込められて居る、けれども人間は萬物の頂上に置かれ其事業を自分で選擇する力を賦與された。而して人間の爲可き業は、金塊が礦山から發掘される前既に價高い黃金であるといふ意味に於て、其れが人間の事業となる以前から善良なものであつた。

一、人間は原始に神と共に在り萬物を創造り給うた『道』たる基督の中に創造られた。人は後肉と成つた『道』を透して肉の體と成つた。而してその榮光の生涯は實に恩寵と眞理に充ち滿ちてゐた。言葉を透して世に來つた神の像に創造られ、而して基督を透して良き業に取次がれた生命は『和解者』と同じ觀念を持つて世に來つた。人間は其の原始め單に萬物の『原因』によつて、地球に投げられた分化されない一個の原形質では無かつた。其の生活が有つに至つた意義は進化の壓迫や自然陶汰や外界の影響によつて印し附けられなかつた。

凡ゆる時代の美術や文學や宗教を積み重ねた大なる觀念は、歴史がその黎明を告げた時、人間の體に滲み亘つて、人間を其の光に照らしてゐた。原始時代の人間もイエスキリストを透して、凡ゆる理の本源たる神の心意から來たつた故に、己が實體の組織に織り込まれた神の思想や神の意志や神の活動を見出す事が出來た。若し彼が偶然結合した土塊と水の合成物で、夫れが單に呼吸して居るものであつたならば、どうしてその靈魂の中心に存在する『造物者』の囁きに導かれずして萬有の頂上に到る途を發見したのであらうか。彼は其の生命の下底に何等變化すべき基型が無いのに、何うしてその變態を續けて上へ上へと攀ぢ登のであらうか、それが問題である。若し彼には觀念が無く、又その所業の計畫は何等其の靈魂に秘められて居らず、而して彼の活動の條目が何等其の心情の中に匿されて居らなかつたとしても、最初人間になりかけた其土塊は他の生物との間に大なる距離りがあつたに違ひない。何等の實現する觀念

とては無く、儆ふ可き基型とては無く、其の奥底に何等原始の火のほのめきが無い此の土塊が何うして斯うも遙々と遠い旅路を續けて、斯うも高い偉業の高原に達したか、之は神秘の神秘である。之は何物よりも不思議な奇蹟である。

二、近時馬匹は改良されて、ケンタッキの草萠ゆる牧場に嘶くやうな立派なものとなつたが皆其の基型に從ひ、觀念によつて進歩したのである。馬となつた創造者の思想が無かつたならば、人間の伴侶たる馬が或は虎や熊や象に成つたのかも知れない。馬といふものに成る原形質に内住する目に見えない原型が無かつたならば、馬が獅子や駱駝に成つたのかも知れない。

觀念には樹の生命や動物の生命の原形質の萠芽が織り込まれてある、而して創造の過程は此等の觀念や原型の顯はれに過ぎないので、其れが植物界や動物界の驚嘆すべき文學品を成したのである。動植物の世界に見る系統、形體、色は總べて萬物の『造主』によつて形作られた動植物の本原的觀念から出たもの

である。思想と目的が無くして生じて來た物は無い。之は確かである。さうでなければ吾々は偶然、僥倖の世界に存在して居る事になる。けれども吾々は宇宙を創造し、宇宙萬物を支配する靈的實在の在ることを知つて居る。若しも宇宙を創造し、支配して事物を照らす智慧が無いならば、宇宙は不可解な暗黑世界に成つてしまふ。

三、偖、凡ゆる種類の動植物が、若し彼等を作つた原型に依て、無數の年月を通じた經過中に決定されるならば、神の創造力の最高表現たる人間は、何等波瀾、爭鬪、誘惑、犧牲等の觀念が無くして其の活動の生涯を始めたと想像すべきであらうか。そんならば、吾々の索むべき實在は人間の生命の奥底に在る特殊な原型である。人間の實體の中心に疊み込まれたのは何んな原型であらうか。人間が此世に來つて以來、其血に流れて居ると感じた內在的有極的原理は何であるか。人類が歷史を編み初めた完全な宇宙的觀念、人間が之を體現して

自己を見出し、之を否認して、自己を失ふ所の觀念、夫れは何んな觀念であるか。此等の問題に對する正しい答解は吾人に宗教問題を氷解せしめ、人生問題を解決せしめる所のものである。

偉大な思想家、偉大な使徒パウロはコリントの教會に書き贈つた第一の書に斯う云つて居る。

『我儕に於ては惟一の神ずなはち父あるのみ萬物これより生り、われら之に歸す、又ひとりの主即ちイエス、キリストあり萬物これに由り我儕も之に由れり。』またエペソの教會に贈つた書に斯う敎へて居る『その賜ひし所は使徒あり豫言者あり傳道者あり牧師あり、敎師あり、これ聖徒を全うし服役の事を行ひキリストの體の德を建て、我儕をして皆おなじく神の子を信じ之を知り全人すなはちキリストの滿ち足れる程と成るまでに至り……愛をもて眞理を行ひ長ちて凡の事首なるキリストに傚はしめん爲めなり、彼を本とし全體すべての

百節の助によりて聯絡、鞏固、其の肢體おの〳〵分量に循ひ方行て其體を育てみづから愛に由りて德を建つるなり』。此等の言葉によつてみれば使徒や豫言者や傳道者はキリストの體の德を建てる特殊な使命を帶びて居たことが明かである。

キリストの體の德を建て上げる事は一個の過程であつて、凡ゆる國民が神の子を信じ神の子を知つて一となり、『全人の滿ち足れる程と成るまで』繼續すべきものである。吾々は此處で、人間が生長してキリストに到り、その肢體と成つてキリストに聯絡、而して完全な、組織的な神人の一全體を成すべきものである事を敎へられる。全人の滿ち足れる程と成るまでに至る爲めには、啻にキリストが肢體に入る許りでなく、肢體總べてがキリストの中に結ばれて一體と成る事が必要である。而して此の世界大な、無限大な體を作す原料は、散々になつた、踏みにじられた、悲慘な、罪になやむ人類の一人々々に見出されるのである。

此の宏大な企圖の擴りが無邊であつて、夫れは神命が成就した時に初めて完成されるのである。之は世の太初からキリストを透して萬物を創造した神に隱された神秘である。之は神がキリストを透して天に在るもの、地に在るものを總べて結び付け、彼に於て一體と成らしめやうとした神秘な神の聖旨である。使徒や豫言者は、萬物を携へ來つて、キリストに結び付け『肢體おの〳〵分量に循ひ方行て其の體を育て』『主』の聖さ殿堂となし、而して夫れが遂に聖靈によつて神の邸宅となるのである。此の聖書の記事は、キリストの體の德が幾百千年を透して次第に生ひ立ち遂に全體が凡ゆる人類を含んで完全な一つのものとなり、而して夫れがキリストの十字架、その甦生、その昇天の生の流れによつて總べての肢體を透して一全體に生くるものである事を示して居る。人間に關する神の思想は、人間が一個體であると同時に、また組織體の一員である。

單一であると同時に多數であるといふのである。人間は神の經綸によつて一全體中に其の部分として生きて居るのである。

四、人間は互ひに部分を成して居るといふ事を曾に聖書から學ぶ許りではない、事實の上からも學んで居る。人類は神の思想によつても、事實によつても、一體であつて、多數の部分を有つて居る。太初に道（ロゴス）と稱へられたキリストは人間生命の『永久の中心』である。彼は昔も今も己れを透して多くの者に生命を與へ、而して一個の體であつて而かも不思議な人類全體の一部分たらしめる所の資質を與へる。彼は人間の生命が形作られた原型である。彼は人間の靈魂をして其の局限された地の境界を超越せしめる所の絶對不變の永久的な本體である。彼は人生に意義を與へる不朽の事實である。彼は萬の物を其の中心に引き寄せる靈魂の重力である。彼は人性てふ葡萄樹を發育せしめた無限の根である。而して葡萄の枝が自由を濫用する事によつて、天の力を失つて

地に凋落しかけた時、彼は眞の葡萄樹として生きた靈の同じ無限の根源から生ひ出でゝ父なる神に到り、而して地上に這ひのびて野獸の足に蹂躙られた凡ゆる枝は眞の葡萄樹の枝であつて、それに多くの實を結ばせ彼を離れて枯れた枝は火に投げ入れて焚かれるのであると敎へて居る。

キリストは凡ゆる宗敎の基を成す所の宇宙に燃え上つて居る實在である。彼は婆羅門敎や佛敎やゾロアスター敎や神道や、凡ゆる地上の異敎の根本を爲す眞理である。彼が若し人生の中心に存在しなかつたならば、地球上の人間は主なる神を求め得なかつたであつたらう。凡ゆる生命の中心に總べてを包含したキリストは歴史の曠野から出て、人間の思想や心情や意志の戸を叩く、あの神を顯はした、史實的なカルバリの十字架に救の血を流した再生の力を透して基督敎國の中に幾多の聖徒を生み出した。凡ゆるものを含蓄してキリストは異敎の國に在つては其の民を宗敎に導いて居る。けれども生命の根原に存在する理

想の基督から遙かに彷徨ひ出て、單に歴史的基督――ベツレヘムに生れ、カルバリに磔つけられ、三日目に甦り、天に昇つた――基督を知つて居るに止まる者は一つの眞に完い絶對なキリストの一分子となる爲めに、異敎の民と等しく其の思想を淨め、其の宗敎を純化しなければならない。知識のキリスト、組織のキリストが歴史のキリストを透して信仰のキリスト、實行のキリストと成つて初めて、異敎は基督敎となるのである。

五、使徒パウロは、人間が本質的にも、完全な一個の組織體を成して居たのである、夫れが唯一人の悖戻の爲めに人間全體が罪に穢れた者と成つた、けれども萬人の『原型』たる萬人の『法惠師』の從順に依つて義に到る途が開けた總ての者は斯く全き一體であるとを敎へた。夫れであるから聖書の敎ふる所は、人類があの砂漠の砂粒が他の聚合した砂の分子に對するやうな關係を有つた所の澤山の個々に成つた原子に分たれて居るのでは無い、といふ事である。人類

はキリストに於て理想の一體に創造されたといふのである。

バーセノンの大殿堂が、アテネのアクロポリス衛城に建てられる以前既に夫れがフイデアスの心靈中に完成して居たやうに、神は、人性が充ち溢れた恩惠を透して神の聖殿となる以前既に永遠から其れをイエスキリストの中に創つて居た。假令、バーセノンの殿堂が完成された曉、夫れが微塵に破壞し去られ、碎片が飛散して全地を蔽ふことがあつても、尙ほ其の代理石の斷片の中に、礦山を穿ち出したあの美の大建築を物語る此の美術家の觀念を見るであらう。

六、使徒パウロは、マースの丘の說敎中に、神は凡ゆる國民を一の血族に創造つた、神は一個の原型に遵つて萬人を創造つたのである、夫れであるから總べての者は結び合つて一體と成るべきものであるといふことを絶叫した。即ち國民は總べて『道』を透して神の懷から出て來たのである。故に彼等は肉體と成つた『道』を透して結び合ひ一個の共動體とならなければならない。之

が聖書の敎へる所である。然らば歷史の事實は如何、人類は互ひに結合して一大組織體を成して居る事は吾人が日々の仕事に於て經驗する所である。吾人は科學に於て、商業に於て、法律に於て、道德に於て、宗敎に於て、一體に統合して居る事は頗る意義深い事實である。

個々の人間が結合して人類が大なる一全體と成るとは何ういふ事であらうか。夫れは偶發的な出來事であらうか、夫れは何等神の豫定に從はなかつたものであらうか。人間は其の原型以上に大きくなつたらうか。彼は創造者の觀念を受けたらうか。彼は己が力を超越したらうか。ヨブは原始人の智慧に生れ付かない傑作を見たであらうか。イザヤは人類の本來に無かつた平和の紀元を夢みたであらうか。ラファエルは、アダムの心像に輝かされなかつた美の要素の幻を見たであらうか。原始人の靈魂に秘められて居なかつたもので開發せしめられた物があらうか。人間が若し、己が原型以上に生長せず、己が創造者の思

想を受けず、また、己が能力をも超越しなかつたならば、人間は結合して單に原型に依つた人類の廣大な一全體を形作つて居る事に成るであらう。吾人は全人類を成して居る者が皆各々個人であることを知つて居る。けれども自己を單獨な一個人としてのみ見る者は、人間としての自己を失つてしまふ。何人も獨立して他と全く關係を絕つた孤獨な境涯に於ては己が生の原型や觀念を體現する事が出來るものでは無い。一個人の心的、道德的、商業的、若くは心靈的能力は組織的一完體としての活力がそれに流れ込まなければ何等の働を爲さない。鵜は生れた許りで自己を知つて居る。けれども自由意志を持つて居る人間は世の中に生れた許りでは自己を知らない、社會的諸關係を透して初めて自己を知るのである。斯ういふやうに人間は實際一個體であると同時に人類の理想的一員である。斯ういふと何だか矛盾して居るやうであるけれども、確かに個人が密接して完全な統一體と成るに隨て各個人は其の個性を發揮して來る、而

して散り散り離々に分れる程其の個性を沒却するものである。砂漠に遊牧する民の生活は頗る單純な孤立的なものであるが、幾百萬のロンドン市民が結合して成す所の倫敦市の一要素に過ぎ無い市民各自の發達した個性は到底かの牧遊民に需める事が出來ない所のものである。

七、人間の生命の原型は何であるか、吾人は之を觀察して、既に聖書の言葉と歴史の事實に學んだが、尙ほ問題に向つて一歩を進めなければならない。總べての人間が段々に地球の極までその網成す複雜な關係に引き入れられて居る事は云ふまでも無い。地球上到る處の國民は『人間の議會、世界の聯邦』に近づいて行つて居る事は喋々する迄もない。各國人が連結し協力して而かも己が本分を果し、而して幾多の種族が一の人間と成る日が早晩到來する事は太陽が出て沒するやうに確實な事實である。吾人が尙ほ攻究せんとする所のものは、外でない、此の莊嚴な人類の一全體に流れ入つて魂を與へ、活力を與へて餘りある偉大な豐富な、何物をも包含して居る、宇宙大な生命は何んな生命であるかといふ問題である。

人間の心意が幾億の頭腦を透して一個の思考を組み立て、幾十億の心情を透して一個の感情に結合し、幾十億の自己決定の中心を透して一個の意志となし、幾十億の個々の勢力を透して一個の行爲となす所を以て見れば、呼吸や、思考や、感情や行爲全體が要求する所の生命は國民的生活が地方的色彩を脫し、宗教的信仰が局限的色彩を離れ。哲學的思索が一時的傾向に走つて居らない所のものでなければならない事は明瞭な事實である。その要求する所の生命は總べて偏狹な不合理なものが排除されて、人間の性質に潛む總べての永久的な不變不動なものが充全されて居る所の生命であるに違ひ無い。夫れは人間をして一個人としても又人類の一員としても永遠に其の本質を保たしめる所の生命である。夫れは人間の中に秘められてゐて、個性の發達や社會生活の移り變つて行

く様々な境遇を透して新たな力を蓄積して新たな要求に應じ、而して幾百億の心情から、博い知識問題に解決を與へる所の深い思想を齎らし得るものである に違ひ無い。夫れは總べての哲學的眞理が内に皷動し、總ての道德的秩序が内に整へられ、凡ゆる藝術美が内に輝いて、宗教的熱火が内に炎々と燃え立つて居る所の生命であるに違ひ無い。夫れは個人、社會、人類の充實した發展の途に於て、また、人間各自の能力に準じて、其の思索的、實際的、道德的、宗教的要求を滿し得る所のものであるに違ひ無い。夫れは人類全體に行き亘つて個人各自に滲み入つて居るものに違ひない。此の人類全體の要求を充す生命は、不完全な意味に於て、何んな生命であつたか、また更に進んだ廣い意味に於て、何んな生命であつたか、而して夫れは完全な意味に於て何んな生命であるか。

八、宗教界は幾多の明星を生み出した。政治界は幾多の革命兒を輩出した。

哲學界は幾多の思想家を送り出した。道德界は幾多の實踐者を藏めて居た。彼等の生涯、彼等の貢獻は文明の一分子を形成して居る。けれども彼等の中其の生命が全人類の組織體に迎合して之に投じ而かも尙、全人類を保護し、之を養ひ、之を皷舞し、之に靈感を與へ、之を永遠に導いて、擴大した、充溢した、香んばしい實在としたものがあらうか。佛陀は宗教界に多大の貢獻を爲した。全人類は、己が生命以外何物も自らを養ひ自らを育くむものがなくして尙永遠に人類が健全であり、永久に生ひ立つて行く事が出來ると思へるだらうか。印度人の生存には永遠に生きる事が必ずしも全人類の運命を保證するものとはならない。孔子は偉大な教訓を垂れた、けれども支那國民をして數千年の間呼吸せしめたあの儒教は人類を指導し、思想を竦動して世界の端まで無限に宣揚されて居るとはいへない。

プラトーは大哲學者であつた。けれども人類の靈魂が若しプラトーの精妙微

を穿つた思想の緻密な纖維に織り成された微細な心意に閉ぢ込められるならば、靈魂はサハラ沙漠のやうに干上つた、炒られた、荒れに荒れたものと成つてしまうであらう。

マホメットは劒と人格の力によつて、よく亞剌比亞種族を靡かす事が出來た。けれども何人か、たゞ妻妾と大軍を提げた以外、何等の更に高い理由がなくして、總ての人類を歸服せしめ得ると思ふ者があらうか。人間が若し或る原型に據つて作られて居るならば、其の原型を完全に活躍せしめる所の人間にして始めて個人及び社會の生命となり、永遠に各部と全體に行き亘つて之を健全なものとなし確實なものとなし得るのである。若し十字架に釘けられて甦り、而して天に昇つたキリストの生命が今日凡ての人類に流れて居るならば、彼は全人類の生命でなければならない。

キリストの生命の力は何等の理論によるのでは無い。また人間が作つた信條

によるのでもない。其の本來の性質によるのである。其れは恰も熱が其の學理に獨立した所の力であるやうに、神學には獨立した所のものである。神學を組織し、教會を建てあげたのは彼の生命である。萬物が若し突然地上から奪ひ去られても、彼の生命の力が直ちに働いて更に更に組織立つた神學を編み、更に多くの教會を興すとであらう。此の生命は古代の神であり而して近代の光である。

第八章　結論

本著の書名は『科學的宗教』であつて『宗教的科學』では無い。それで此の二者の間に存する相違を今此結論で更う一度明かにしよう。宗教的科學といふのは、丁度植物學が植物全體の研究によつて得た確實な知識の一體系であるやうに、それは凡ゆる宗教を研究して得た確實な知識の一體をいふのである。

學者は文明人から蠻民の端まで此の活動の色彩に富んだ凡ゆる人間の生涯に顯はれた此の宗教性に就いて頗る緻密な穿鑿を遂げて居る。彼等は萬有精神論や呪物崇拜や多神教やまたは婆羅門教や儒教やプロイスター教や佛教や基督教といふ凡ゆる種類の宗教を研究し盡して居る。彼等は解剖したり、比較したりして宗教といふ宗教の根底を成して居る所の觀念を見出した。而して各宗教に通じた所の要素といふ物がある事を知つた。即ち何の宗教にも信仰心があつて

其の對象を見出して居る。また何者かを知覺して夫れに賴り、而して自分の爲す事に就いて其の者に責任を感じて居る。而して又信賴者は犧牲の行爲と祈禱によつて獨立者に和解を求め、そして彼我の調和を來らせようとして居るやうに見える。一般宗教に通じた要素は、蠻民が奉ずる萬有精神論からも、聖賢の理智的な宗教からも、皆引き出されて、それが比較され、分類されて宗教的科學を組織する原料とされた。

宗教は總べて渴仰者と渴仰される事物の關係を認める。而して此關係が緊張したり、此の關係が途切れたりして居る、而してそれが悔改、和解、崇拜、奉仕によつて贖はれるものだと斯う思うて居る。

一、吾々は、基督教を科學的宗教と稱へる。夫れは吾々の宗教的科學を組織立てた學者が教へた凡ゆる宗教の根本的條件たる觀念が基督教に於て完全に表白され、遺憾無く體現されて居るからである。萬有精神論が自然界に感ずる天

然自然の宗教觀念、婆羅門教が思想に索める無限界の模糊とした觀念、而して所謂、道德的宗教たる儒教、ゾロアスター教、佛教が良心に見る、神の不完全な觀念は、基督教に顯現した我が主イエス、キリストの父なる神の中に完全に體現した觀念と同じ觀念が低い人間の意識に顯はれたものである。神と罪人の間にある陷隙に橋を架けようとした愚かしい宗教に見る、あの朦朧した贖罪の觀念は『神の子』であり、人の子』である基督の十字架の愛によつて結ばれた神人の和解の中に完全に現はされた明瞭な贖罪の觀念と同一のものである。

二、基督教の中に完全に現はされて居る宗教の觀念が、凡ゆる宗教には多少夫れが自然の儘に淺く顯はされて居る。何の宗教にも眞理の要素や善の本質や神の局部的顯現や靈的生活を爲さしめる何物かゞある、けれども皆少からぬ誤謬を藏して居て之に據る者は、道德的にも社會的にも神靈的にも健全な途を進んで行く事が出來ない。

けれども吾人は基督教の中に、凡ゆる宗教の基をなす根本的觀念が調和的に完全に表現されて居る事を認めるとは云へ、基督教は異教の中に見出された正しい要素を結合した靈的實在の折衷的組織であるとは思はない。基督教は、其の本性に於ても力に於ても自然教や異教に負ふ所は少しも無い。異教、自然教は、基督教に負ふ所がある。彼等は其存在を基督教に負ふ許りでは無く其の含む善なる要素を基督教に負うて居る。基督教は絶對的に根本的な宗教である。獨創的な宗教である。基督教が若し根本的な獨創的な宗教でないならば、其れを科學的宗教といふのは妥當でない許りでは無く不合理である。基督教は其の濫觴をベツレヘムの馬槽に發したのでは無い、キリストと共に初めてベツレヘムに生れ出たのでは無い。夫れはカルバリ山上に叭々の聲をあげたのでは無い。夫れは歴史の舞臺に顯はれ來る以前既に其處にあつたのである。然り、基督教は神とその齡を同じうするものである。

基督教は科學的宗教である。何故なれば基督教は凡ゆる宗教の基を成す觀念の完全な體現であることを宗教的科學が證明して居るからである。

吾々が若し植物界に於て、恰も基督教が、凡ゆる宗教の基本的要素を內に包含し、而して之を表現して居るやうに、凡ゆる植物の本質的要素を完全に內に含蓄して之を完全に表現した樹を見出す事が出來るならば、吾々は植物界の全意義がその科學的樹木に體現されてをると稱ふる事が出來よう。

けれども、宗教が占領して居る實在の標準は、遙かに高く樹の天地を凌駕して居る、恰も精神が物質の上に在るやうなものである。樹が表現した思想は、其の種類のやうに多種多樣である。思ふ存分に發育して居る樹は己が部類に特有な觀念を體現して居る。植物の生命中、宏大莊麗な表現に至つては樫が栗や楓や松や水木や他の何んな樹にも勝つて居る。樫、栗、楓、松、水木は皆夫れ夫れ異つた部類の植物の生命が成す表現である。これらの樹は、彼等總べ

ての本質的な要素を表はす事が出來なかつた。排除の法則は、下等な動物を支配して居るやうに植物の世界を支配して居る、けれども包括、共同の法則は人間靈魂の王國を支配するやうに豫定されて居る。而して人類は人間種族の集合體では無い。樹ならば、其の各種類の樹を截り倒して積み重ねた堆積が、その總合ともいへよう。併し人間は然うは云はれない、人間は一體である。『我儕、各々キリストに於て一體たれば亦互ひにその肢たるなり』

三、植物界には殆ど數へ切れ無い程種々な種類の植物がある。人間の王國には唯一種類である。植物學といふ科學を組織するのには幾千といふ程の凡ゆる種類の植物が必要である。單に一種類の植物では、何んなに完全なものであつても、他の凡ゆる植物を完全に代表するものでは無い。何の種類の植物も皆各々その標型に從つて生長して行く。それだから凡ゆる植物を一緒にしたものは、科學的樹木とも云へよう、けれども、唯一種類の樹では科學的樹木といふ

事が出來無い、夫れは、一本の樹は自分以外の植物の生命を代表しないからで、結局其の樹があつても夫れは他の種類の樹木の生命の完成には何等の必要が無いからである。要するに植物の全生命の基底を成して植物を組織的な統一體とする所の一貫した大觀念が無いのである。

四、自然や異教は總て基督教が生れ出たと同じ人間の本性から來つた事は事實である。人間は本來宗教的な活物である。人間は其の進歩發達の如何を問はず皆等しく自己に內在し、世界に內在し神に內在する同一の事實を經驗して居る。人間は凡ゆる宗教に於て自ら無限の世界を經驗する有限な實在である事を認めて居る。又、有限の世界と無限の世界は調和の關係を保つべきものである事を感じて居る。けれども宗教は幾つにも分れて居る、それは人間の生死、苦惱、應報、有限世界、無限世界、人間が神と和ぐ方法、此等に關する知的な道德的な神靈的な進歩の如何によつて、其の見解が違ふからである。併し何れの

宗教でも人間が解決しようとして居る問題は同一である。而かも人間が其の宗教問題の解決を與へられたのは基督教を措いて外には無い。凡ゆる宗教に表はれて居る靈的慾求は基督教に於て總べてが完全に滿されて居る。凡ゆる宗教に見る靈的生命の蕾が基督教に來つて花を開く。自然教や、異教は基督教に解釋されて初めて了解されるのである。

吾人は野生の林檎を科學的な林檎と云ふ事が出來ないやうに、婆羅門教を科學的宗教と稱へる事が出來無い。野生の林檎には完全した林檎の意義が闡明されて居らない。而して婆羅門教には完全した宗教の定義が與へられて居らない。婆羅門教には、宗教的觀念が實現されて居ない。また、人間の個人的な、宗教的要求も社會的要求も共に滿されて居ない。神は有限的事物を全く超越した絕對的な孤立的な者である。婆羅門教は神以外の萬物を幻想と見做して淸い、高い過程を進んで行つて、遂には神其のものまでが道義性、智慧、自由、神聖、愛

といふものを失つてしまふ。

基督教を自然教や異教と比較するのは恰も太古時代に棲むだ五足の馬を、あのケンタッキの草青い地方に嘶く駿馬に比べるやうなものである。

五、基督教は他の宗教と等しく人間の本性に内住する理體（基督）の生長發達したものである。而かも此の基督教が躍り出た人間の本質は、アブラハムの時代から、選民の中にあつて神と聖靈によつて分化され教訓され鍛錬されてゐた聖オーガスチンが云つた『基督教は太古民の中に存在してゐた、而かも其れは實に太初から人類と共に存在した』。デオネシウスが斯ういつた『蠻民や希臘人の哲學は「永遠の道」の神學から出た斷片に過ぎない』。ウイリアム・ローは斯う教へた『基督は人間の靈魂に秘められた財寶であつて、凡ゆる人靈が生れた時に「道」の種子として血と肉の中に生れたのである』。ジャスアン・マーターが云つた『基督は總べての人類が頒ち享けて居る「道」である』。

六、故に、基督教の意義を見出すのには、人生てふ境界の外部に目を放つ必要が無い。基督は人間に無關係な原理には關係なく來つて働いた。彼は其の姿を歴史に顯はした時、人間が克ち得た其の生涯に達する爲めに人間の從つて來た原則は眞に彼等自身と同一のものである事を證明した。基督は原始から人間の進歩の原則であつた所の惱める愛の法則に自らを與へた。聖パウロは此の靈的實在を基督の十字架と名付けて其の十字架を負ふ事をば自ら誇りとした。彼は基督の十字架を負ふ事によつて、世に對しては自らを十字架に釘け、自らに對しては世を十字架につけたといつて居る。パウロが加拉太書の最後に云つたあの强者の叫を忘れてはならぬ『然ど我には惟われらの主イエス、キリストの十字架の外に誇る所なからんことを願ふ。此のキリストに由りて我世に向へば世は十字架に釘けられ、世の我に向ふも亦然り……今よりのち誰も我を擾らはす勿れ、蓋われ身にイエスの印記を佩びたればなり』。彼の教へた十字架は、萬

人に高い力を與へる理想的實在である。凡ゆる歴史を通じて何人が土塊より身を起しパウロのやうに、キリストの十字架を負うて其の肉と慾とを高い高い眞理と愛の本性に從屬せしめて天上に奔騰したものがあらうか。キリストは、幾多の熱烈な献身犧牲の徒が、凡ゆる國にあらはれて其の限られた途に爲しつゝあつた事を悉く成就せしめんが爲めに歴史の表に現はれ出た。斯うして彼が躬ら行つた犧牲の原理は遂に彼自身の名を與へられた、即ちキリストの十字架と稱へられたのである。其れはキリストの十字架と云はれた。何となればキリストは世を救はんが爲めに十字架上にその生命を犧牲に供し、十字架の意義を强め、十字架の意義を明かにしたからである。

七、人間は己が本質の奥底に潜んで居るものが何であるか、其れが表白されなければ解るものでは無い。歴史のキリストは世の罪を赦はんが爲めにカルバリの丘で血を流した。彼の基督は世の原始から人間の救の爲めに自らを犧牲に

した内的な永遠の基督の肉の體現であつた。凡ゆる人間の中に其の能力と感受性に應じて廣く働き、人間の無意識な力と成つて作用してゐた基督は時到つて遂に人間の形をとり人間の世界に停まつて、其の事業、其の受難の生きて縮圖と成つた、而して遂に全人類が彼の統率の下に組織されて一體と成るまで、彼は萬代を通じて人類の爲めに其の事業を繼續し、受難の杯を仰いで居る。

人間の本性の最も深奥な事實は其の内にある神の像である。人間の靈魂の奥底に秘められた不朽の事實が不變の原理はキリストが實現した永遠不滅の觀念である。夫れであるから、全人類の各個人の職分は恰も實體の奥に秘められた種子に宿る樹の夫れのやうに、神聖な人間性を其の心情に移し、意識に上せ而して充全した生命の完成した形體に表現せしめる事である。

八、現實の人間は一寸見た所では、下等動物と從兄弟同士である、けれども此の人間は神の像に造られて居るから、彼の本性には不滅の種子が植ゑ付けら

れて居る。吾々は歴史のキリスト、カルバリ山上のキリストに於て、凡ゆる人間の内に秘められた靈魂が人間の形體をとつた純潔な完全な顯現を見るのである。キリストの中には、人間の性質と神の性質が合一されて居る、恐らく人間の中にも此等の性質が併合されて居る。人間に見る神の神秘と不可思議はイエスキリストに依つて壟斷され蕩盡されはしなかつた。全人類の享けた神聖な人間性はキリストの中に完全に集中し遺憾無く表現されて居た事は事實である。而して吾々の不可思議な體に深く潜まされた眞理は、キリストに依つて闡明された。人間は總べてキリストの恩寵と慈愛を透してキリストの如く成る事が出來る。人間は總て若し自らを知つて永遠の繼承者が住む國へ到らうとすれば、キリストの如くならなければならない。人間は總べの神の繼嗣であつてキリストと偕に後嗣たる者である。人間性がキリストを信ずる事によつて完きものとなる時に人間は『滿ち足る程と成るまでに至る』のである。基督の生涯は人間の生活の典型である。

九、基督が云つた『我はアブラハムの有らざりし先より在る者なり』。之に就て問題が起る。キリストはアブラハム以前には何を爲して居たか。アブラハムの時から西暦の始めまで何を爲して居たか。夫れから千九百年迄何を爲して居たかといふのであるが答は頗る明瞭である。即ち、彼はアブラハムの前後及びアダムから現代までの長年月を透して、彼は肉の體をとつて地球上に居た時爲したと確然同一な事を爲して居たのである。彼が其の命を捐てゝ居たのは再び夫れを得んが爲めである。『わが父われを愛す――蓋、われ再び生を得んが爲めに――命を捐るが故なり』。彼は世界の基を定めた時から既に殺された子羊であつた。而して人間が地球上に呼吸し初めて以來キリストは人類の中にあつて、若くは人類の代表的人物の體に在つて血を流して居た。彼には活動の年月が續いた、疲れに疲れた其の長い間を透して彼は拒まれた、嘲けられた、撲た

れた、唾かけられた、十字架に釘られた、けれども彼は此の屈辱から昇つて榮光に入つた、彼は死の闇から出て不滅の光に復つた。而して彼の血に染む足の跡を辿る路には歴史の花が咲き薫つて、不斷の芳香が其處に漂うて居るのを見る事が出來る。彼はアベルの靈の中で斯う云はなかつたらうか『われは再びその兄弟の血の純潔な命を得んが爲めにわが命を捐つ』。彼はアブラハムの中に斯ういつたかも知れない『我は再びあのカルデヤのウルよりも高く清い生命を得んが爲めに此の信仰の父にわが命を捐つ』。彼の生命はモーセに在つて十字架に釘けられた、それは埃及の束縛から免れて解放の境に再び生命を得よう爲めであつた。彼の生命はダビデ王の内に在つて磔られた、それは萬世を貫いて凡ゆる人間の心情を觀ばせた歌に再び生命を得よう爲めであつた。彼はイザヤやエレミヤや其の他凡ゆる豫言者の苦惱に入つて惱みを受けた、それは輝く日の黎明を見よう爲めであつた。

十、基督は彼のカインがアベルを殺して以來、弱者、蹂躙られた者の心に到る使節であつた。また代辯者であつた。彼は凡ゆる人間の靈魂の深淵に聞える聲である。彼の『われ再び命を得んが爲めに――命を捐つるなり』といふ言葉の時制は現在進行法である。彼はカルバリの懊惱を知る以前に之を言つた。吾々はあの孤立した苦惱の頂點に『人の子』と『神の子』の永遠無窮の閃きを見るのである。基督の死には人間も神も共に與かつて居た。彼等は當時神が受けた惱みと人類の代表者としての基督が受けた惱みを凡ゆる神人と共に爾來受けて來た。而して彼等は總べての不善がその跡を絶ち總べての罪惡が地を拂ふまで其の惱みを繼續するのである。

一般に基督信徒は、基督が人類を救はんが爲めに必要な死を遂げられたのであると思つて居る。吾々は『神は總べて者の爲めに十字架に掛り』と讃美ふけれども吾々は基督の惱の中に無かつたものや隱されて見えなかつたものを吾々

の苦惱に滿さなければならないことを忘れてはならない。基督は吾々を十字架から救はんが爲めでは無く、全人が如何に十字架を負うたか、また、吾々が如何に十字架を負ふべきか其れを敎へんが爲めに彼は十字架に釘いたのである。彼は幾多の聖別者の自我に己が命を捐てた。彼は時代、國民、地位等には何等頓着しない。彼は異敎のヨブの內に己が命を捐てる好機を見出した。それは更に神の聖意に適つた命を再び得よう爲めであつた。彼は異敎のソクラテスの內に己が生命を捐てる人間を見出でた。それは更に高い尙い思想に再び命を得よう爲であつた。彼は聖フランシスの內に己が命を捐てる人間を見出した。それは信仰厚いフランシス敎團の僧侶が始めた更に美はしい生涯に再び命を得ようが爲めであつた。彼はイグナテアス・ロヨラの內に己が命を捐てる機會を捕へた。それは人類と文明に多大の貢獻を爲したジエズイットの高潔な一群中に再び命を得よう爲であつた。彼は、あの心性の高い猶太人サー・モーゼス・モンテフ

イオレの內に己が命を捨てた、夫れは蹂躙された、迫害された人々の爲めに更によい境遇に再び命を得よう爲めであつた。彼はジョン・ウエスレーに己が命を捐てる靈魂を見出でた。それは第十九世紀の宗敎革命に於て、罪から聖潔に擧げられた、贖はれた多くの人々の中に再び其の命を得よう爲めであつた。彼は美はしいフロレンス・ナイチンゲールに己が命を捐てた。それは死に瀕して居る戰士の光を失つた顏に暗い蔭が漂うて居る其所に再び命を得よう爲めであつた

十一、人類は一本の木幹から成り立ち、一個の標型に像られ、一個の計畫に從つて創造られ、一個のプログラムを滿すように作られて居る事は科學と聖書の敎ふる所である。

人類は原始時代から徐々に進んで次第に其の社會生活を推し擴め政治に實業に、又宗敎に團體生活を進展せしめて來た事は歷史の敎ふる所である。總べての國民が智の照耀、德の啓發、靈の進步によつて遂に世界的に聯結し同盟すべ

きものである事は凡ゆる大豫言者や大詩人の洞見であつて、また現代政治家の推斷である。

十二、商業的、智的、道德的、靈的一致なるものは人間の活動的な生涯が齎らした究局の結果に外ならない。これは元々一致そのものが既に人間の生命の眞底に存在する本來の根本的事實だからである。人間の本性に潜まされた深い深い觀念が時と智と經驗を透して、實際生活に含まれるやうに成るのは必然である。之は恰も橡子に容つて居る種子が土と雨と日光と暴風雨によつて遂に蔭を成す喬木に宿るのと同じである。人類の組織に織り込まれた此の本來の一致は原始的な未成物であつた、けれども種子固有の最初の不完全な一致が遂には發達した完全に表はされた一致と成り夥多の枝を出し、繁げみの深い樫となつて橡子を實らすやうに、人類本來の此の可能的な潛勢的な一致が幾千萬年の星霜を閲して遂に充全した生活と成り、完備した制度と成り、斯うして完全な人類社會を成すようになるに違ひない。人間はすべて、一人の完全な宇宙的人間と生きた接觸をなし、生きた一致を成して全き者と成り而して人類全般に亘つて必須な此の大なる生命の完成に努力せねばならぬ。

十三、劒戟の音、撞着の響、混亂相踵いだ時代を透し、幾多の論爭や生の惱みを透し、政敎の苦鬪や宗門の悽慘を極めた跡を辿つて見るならば、時代に伴はれた一致の意識が段々に深くなり、美はしく成り優つて來た事を見るであらう。此の意識が今日は昨日より更に深く、明日は今日より更に美はしく照り耀えて行くのである。凡ゆる國民の生命の上ゆく流れが凡ゆる國民の中に漲つて、其れが好意てふ人類の大海に注ぎ込むで行つて居る。これは過去の時代に見られないものであつた。人間の本性から溢れ出た此の温かな入江の流が遂に凡ゆる海岸に打ち寄せて社會の氣温を變ずるまでは何物も、斷じて此の流れを阻止める事が出來ない。此の本原は人間の歷史の源泉である。夫れは永遠の泉と『命

の道』から一直線に流れ來るものである。夫れは擴げられた河床に氾濫して國民の倦み疲れた生命を生き復らせて居る。

此の命の力、此の愛の力、此の世界を一致せしめる力の背後に『不變の力』が存在して居て、神がその力を透して、その力の中に凡ゆる國民を造り地球表面の到る處に住まはせたのである。

十四、トマス、カーライルが斯う云つた『神の觀念が眼界に充ち滿ちて居る、けれども其の象徴その物や、目に見える表彰そのものには何等の意義が無い。また神の觀念を離れてはその存在さへも認められない。此の神の觀念は、人間に隱されて居て見えない、併し其觀念を識別して了解し、而して全く其の中に生きるならば凡ゆる眞の道德、知識、自由を得、而して靈的努力の目指す所に達するのである』。希臘人は宇宙に瀰漫する此の神の觀念を理體と稱へた。聖ヨハネは歴史の基督はこの現象世界に充溢する神の觀念の肉體と成つた體現であ

ると考へた。基督は自らを宇宙に行き亘つて居る神の思想が歴史の活舞臺に顯はれたのであると信じてゐた。宇宙に漲つて居る神の觀念即ち理體（基督）の内には、恰も麥が總べて最初の麥粒の中にあり得べきものであるやうに、凡ゆる人間が包含されてゐた。

唯一個の觀念、唯一個の計畫、唯一個の標型、唯一個のプログラムが人間の組織の中に疊み込まれて居る。此の觀念を現實し、此の計畫を成し遂げ、此の標型を表現し、此のプログラムを充塡する事が歴史の神の目的である。

十五、ダーウインは自然界の法則を『生存競爭に最も適する生存者』といふ言葉で定義した。恐らく不動の土地と食物に不足を告げる程の多數の生物が生れ出る。其の增加率を抑制しよう爲めには勢ひ弱者を篩ひのける大虐殺が行はれなければならない。一本の樹が天日を仰がんが爲めには九十九本の樹が其の發生を絶たれ、一羽の雀が生存の機會を與へられる爲めには一千の雀が死なけ

ればならない。一匹の昆虫が其の果敢ない命を得よう爲めには一萬の昆虫が死の闇に叩き落されるのである。けれども少數のものゝ爲めに多數のものを犧牲に供する此の自然の法則は花に多種の色彩を與へ、鳥に輝いた羽毛を與へ、虎や獅子や麒麟や他の動物に美と力と雅致を與へると云はれる、自然の美と光耀は强者が生きよう爲めに弱者を虐げる天則によつて齎らされるのであるといふあの胡蝶の羽毛の輝いた色彩は其の殺戮された友輩の血から滴り流れて居るのである。

十六、基督の說き明かした人間界の法則は此の反對である。即ち多數の弱者が生存する爲めには少數の强者が犧牲に供せられるのである。か弱い賴りない者を篩ひ除けるのでは無くして彼等に力を與へ、希望を與へて之を生かすのである。動物は弱者を虐げる事によつて强者となる。人間は弱者を向上せしめ助長せしめる事によつて强者と成る。森林の法則は物質的なものであり、人生の

法則は靈的なものである。人間が叢林の法則によつて生きる時は、ネロ王となり、カリグラとなり、ラメセス二世となる。人間が人間世界の法則たる靈の法則に從ふ時は、モーゼとなり、聖ヨハネとなり、ジョン・ハワードと成り、或はウイリアム・ウイルバーフオースとなる。女性が動物界の法則に隨ふ時は、エゼベルとなり、クレオパトラと成り、ヘロデアと成り、カザリンと成る。婦人が女性の法則に隨ふ時は、ヴイクトリア女王と成り、ナイチンゲールと成り、フランシス・ウイラードと成る。動物は殘虐な力を用ゐて其の種族を死に到らしめる事に因つて美はしいものと成り、人間は靈の力を加へて弱者に命を與へる事によつて善美な者と成る。

十七、獸類が互ひに食み合つても其の種屬には何等の損失がない。喩へば一匹の栗鼠が他の總ゆる栗鼠を壓殺した處で、その栗鼠が、抑々の初から栗鼠の全種族が有つて居た富を依然自ら壟斷する事が出來るから、栗鼠その物には何

等の損失が無い。即ち死と撲滅の貴族的な法則は動物界には何等の痛痒を感じない。けれども人間世界に於ては、人類全體を組織する爲めには何んなに病める者でも、貧しい者でも、又賤しい者でも絶對に必要であるから皆何れも無限な價値を有つて居る。嘗つて過去に生きて居つた者も、現在生きて居る者も、或は未來に生きる者も、總べての人間があつて初めて一人の人間の命を豐富ならしめ完全ならしめるのである。人間は互ひに四肢を成して、持ち合つて居るものである。夫れだから極くつまらない分子が踏みにじられ、投げ棄てられた時でも、丁度小指が一寸傷して體に應へるやうに、夫れが痲痺して居るか、死んで居ない限り、人類全體が疼痛を感ずるのである。

十八、ダーウインは叢林に棲むものゝ生活を研究して、自己の爲めに他を犧牲にする――强者の爲めに弱者を犧牲にする事に體現された動物界の法則を見出でた。イエス、キリストは、人類の法則が他の爲めに自己を犧牲にする――

弱者の爲めに强者が犧牲になる事に體現されて居るといつた。

キリストが云つた『その生命を得る者は之を失ひ、我が爲めに命を失ふ者は之を得べし』。

ハックスレーは人間が叢林の法則よりも高い法則に遵つて向上して居ると云つた。

『道德的最善――吾人が稱ふる善若くは德は何れの方面から見ても宇宙の生存競爭の優勝者たらしめまいとする行爲の道程を包含して居る。即ち道德は酷薄な自我主張を爲さしめずして、自制克己せしめ、凡ての競爭者を押壓し蹂躙する事を許さず、各人は他を尊重し、助長すべき事を要求する。而して德力の及ぶ所は、啻に生存の最適者のみに止らず、多數の生存者に涉つて居る。……法則、道德は宇宙の過程を曲げ、人をして團體に對する義務の念を起さしめ、彼を庇護して動物生活以上に生存せしめる』。

けれども、人間が虎や鬣狗が遵つて居る宇宙の法則に抗する事をよく認めない。彼は斯ういつて居る。

『人間の力と智慧は大なる年の進行を抑へ得るとは何うしても想像されない』。

彼の意見に據れば、地球は下向しつゝある者で人間は道德法を守つても動物法に遵つても遂には人類の挫敗を來して凋落に終らなければならない。

けれども基督は他の爲めに自己を犧牲に供する法則は、人間を敗北に終らせることがなく、永遠に亘つて己を生かす輝きの途であると敎へた。基督自身が遵つて、人間生活の宇宙的法則であると云つた此法則は人間を支配する人類唯一の法則であることが段々に認められて來た。

十九、黎明を告げる新しい光が人類の闇を破つて『人の子』と『神の子』の日の永遠の眞晝を豫示する時、平和の契約が敎會の指導者の心を喚び起す許りで無く、それは國家に權柄を執る者の目を峙たしめて居る。人の世界に居る者

が自ら生きようとして世の人の爲めにする犧牲の法則は、また人類の目には國民の法則とも映つて居る。我が合衆國の政治家は、我等が世界の强國と親交を全うしよう爲めに海陸の武裝を解いた人民として貧弱な、限局されたアメリカ人の自我を以てしては到底滿足が出來なく成つて居る。斯ういふやうにして生きようとするものは、かの羅馬のやうに、または叢林の法則を實行して生きようと焦燥つた國人のやうに、遂には滅亡の悲運に推し落されてしまふ。ノルマン・エンジエルが新時代を劃する其の著『偉大な幻』の中に、鬣狗や虎の法則に遵つて捷ち誇る征服者は其の血に塗れた敗北者に勝る大なる災禍を受けるといつて居る。國民が若し勝利に生きる事によつて、自らを失ふならば彼は他の國民に厚誼を盡し他の國民に貢獻し他の國民の爲めに自己を犧牲に供する事によつて自ら生きるのでは無からうか。獨逸が若しエンジエルのいふ如く、英國を征服する事によつて獨逸國民を滅すならば、彼は、商業に・知識に、道德に、

心靈に其他凡ゆる途に於て英國に貢献する事によつて獨逸國民を富强たらしめるのではなからうか。互ひに助長し、貢献し合ふ事が、凡ゆる國際間の慣例と成つた曉には、各國は互ひに他の國の富と智と殖産興業力によつて自らを富ましし自らを增大せしめるのは明かな事實ではなからうか。確かに、國民は最早、森林の法則によつて支配され左右されて其の進行を繼續する事が出來ない。人類は必然其の生命の根本法則たるキリストの法則に從はなければならない。左もなければ人類は總べて自滅を覺悟する外ないのである。

今や、大空の領土は軍用飛行機を飛翔せしめて獨逸から英國へ渡り、遙かに合衆國の都市の上に來つて爆彈を投下することを得せしめて居る。人間は遂に、互ひに他の者を愛し、他の者を助け、他の者の爲めに、犧牲と成る事が、自他を生かすことを知ると同時に、尙ほ叢林の法則の下に生きようとすれば互ひに破滅に終るものである事を知つた。

イエス、キリストの內に秘められた靈の法則を透して得た識見はあのユーゴーに斯う云はしめた——

『榮え輝いた人間の綺羅星が、鳴り渡つて來る終りの日の死を告げる喇叭の靑ざめた音に打たれて、底ひも知られない渦卷へ消え失せて行つた、けれども遙と向ふの極に當つて、世の滅びの雲が、永遠の大空の懷に消えた時、眞の明星が、聖い銀河に爛として輝き上つた』——オルフォイス、ヘルメス、ヨブ、ホーマー、イザヤ、エゼキエル、ヒポクラテス、フイデアス、ソクラテス、ソフオクレス、プラトー、アリストートル、アルキメデス、ユークリッド、ピタゴラス、ルクレーシヤス、プラウタス、ジユヴイナル、タシタス、パウロ、パトモスのヨハネ、ペラギウス、ダンテ、グテンベルヒ、コロンブス、ルーテル、ミケランゼロ、コペルニカス、ガリレオ、ラブレイ、セルヴアンテス、シエクスピア、レンブラント、ケプラー、ミルトン、ニウトン、カント、ベトウヴエン、

フルトン、ワシントン――これらの宿星が刻一刻と輝を增し天界はダイヤモンドの冠を成して、明瞭と地平線を照らし、而して其の顯はるゝや皆イエスキリストの無邊の黎明をほのめかせて居る。

二十、吾々は基督教が、人生の宗教に滲み亘つて居る神の思想の完全な體現であつて、而して太初に神と偕にあつた神『永遠の道』の來歷に完全に顯はれたものであると觀ずる時に、基督の成業を想ふのは六かしくない。

基督は吾人を照らす光である。彼は人類を新たにする水である。彼は世界を溫める熱火である。彼は生命のパンである。彼は法則である。實に彼は眞理そのものである。基督が云つた『吾を離れて汝等は何をも爲すこと能はず』。之は事實である。空氣が無ければ肺臟は呼吸作用を營む事が出來ないやうに、光が無ければ目は何物をも見得ないやうに、吾々は基督の法則に據らなければ眞に生きる事が出來ない。

基督は、罪人たる人間の外部の和解者と成る以前既に人間內部の和解者であつた。彼は、世界が肉體となつた基督を見る以前から既に世界に存在してゐた。世界は基督が顯はれ出て贖ひを成し、之を新たな組織となす以前既に彼によつて造られてゐた。彼は世に來つて人間を外部から救ひ出す以前に內部から救ひ出さうと試みた。彼は眞理を說明する以前には眞理を包含した基督であつた。彼は肉體に顯現する以前には人類の宗教心の奧底に潛んで居た。彼は罪惡を創造つたのではなく世をその罪のなかから救ひ出さう爲めに世に遣はされた救世主である。彼は肉の形をとり世に來つて人類を贖ふ以前には人間の意識の中に一個の無意識な力として働いて居た。彼は人間を天の父に歸らせよう爲め人類に來る以前、人間の高い性質を創造つた者であつた。彼は地に顯はれて人間に神を示した以前には神の內に人類を代表して居た。彼は、懊惱、自己犧牲の標型と成り人間の救主となる以前既に天に於いて人間の原型であつた。彼が地

上に始めた生活は決して彼の新生活では無かつたのである。

二十一、基督は神である、けれども人間も亦神であるといふは恰も太陽が光を發する、けれども蠟燭も光を與へるといふのと一般である。蠟燭の光を發するのは、太陽が光を世界に漲らすのと同じ原理に基いて居る。けれども蠟燭は太陽の光が無い夜中僅かに暗を照らすものである事は三才の童兒もよく知つて居る。人間は基督と同じ神の像型に作られた、けれども人間はキリストからその組織を受けて居るから神的であるのである。而してあの十字架に掛り、甦りて昇天した神の子の充實した生命をその組織に受けて居るから眞に神的なのである。夫れであるからキリストが無かつたならば、人間は神的に創造られはしなかつたのである。人類を罪と死の法則から解き放つて、靈に歩ましめる十字架のキリストが無かつたならば、人間は神的生活を一刻も爲し得るものでは無い。多くの人々は神の思想が不明瞭な爲めにキリストの神性と人間の神性

を混同して見違へて居る。之は多くの人が創造の基督を考へずして基督の生活がベツレヘムに始まつたと考へる所から來た謬見である。吾々は事物の本源に溯つて研究するのでなければ凡ての宗教、哲學、萬有の究極の要素たる自己、世界、神に關する問題を解決することが出來ない。

吾々が創造のキリストを研究して、恰もかの橡子に樫樹を知るやうに、キリストが人性に秘んで居る事が解る。種子に存する生命の萠芽が生長して幾年かの後には再び種子と成り、斯うしていつも循環して小い樫を完成して居る。けれども萬有の原始に生れたキリストから凡ゆる時代を透して凡ゆる人間の中に無數の分化されたキリストを生む神の無限の愛を完成する爲めには、原始人から最後の人間まで凡ゆる人間の全生涯を要するのである。

地質學者は、人間が過去の凡ゆる時間の僅か一パーセントの半分位を用ひて漸う現在の生涯に達したといつて居る。即ち人間は地球上の生活を始めた許り

である。而して神はキリストを透して、豫言者や、詩人が夢想した歴史に神の經綸を行はんと企てゝ居たのである。使徒パウロに據れば、神の目的は人間個人の完成を圖る許りでは無く、組織體としての人類全體の完成を期して居るのである。

宗教を研究すれば、それが智的宗教でも、萬有精神論のやうな低級なものでも皆人間と神との關係を表はして居る。昔フッカーは、『神が一人存在し、而かも神は不變な全一體である』と云つた。然んならば宗教は單一の神と人間の關係である。而して之は宗教の一般的、宇宙的な永遠不朽の事實であるが、問題は此の事實に潜む思想を體現し得る宗教の形體如何である。之を發見すれば科學的宗教の何たるかを了得することが出來る。基督教は人類全般に亘る統一體のプログラムにより、全人類を結び付けて一體と成す確實な贖罪により、其のプログラムを實現し、神と人の和解をなさしめ、人と人を融和せしめる愛の犧牲

力によつて、絶對的な宇宙的な宗教である。基督教は思索的宗教では無く、活動的宗教である。基督教は理論に據つて進まず實際的結果に據つて進んで行く。基督教は本來人間を靈感せしめ、活躍して凱歌を奏せしめるものであつて徒らに人を刺戟して思索に恥らしめる宗教では無い。基督教は、恰も電氣が意志を透して鐵道列車に體現し、又は夜の巷に體現して不夜城を現ずるやうに、意志の働を透して人間の德性に法律に、政治に、或は美術に、或は文學に其の實體を表現するのである。

科學より宗教へ　終

大正六年五月十五日印刷
大正六年五月十八日發行

定價金八拾錢

譯者　三浦關造
東京市京橋區明石町八番地
基督教興文協會代表者
エス、エチ、ウエンライト

發行者　横濱市太田町五丁目八十七番地
村岡平吉

印刷者　東京市京橋區銀座四丁目一番地
福音印刷株式會社

印刷所　東京市京橋區明石町八番地
日本基督教興文協會

發行所　教文館・警醒社・丸善書店・岩波書店

發賣所　基督教書類會社・

不許複製

325
495

終